
石ころ的な物を拾ったら犯罪者のアジト！？

アビス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

石ころ的な物を拾ったら犯罪者のアジト！？

【Nコード】

N4709X

【作者名】

アビス

【あらすじ】

俺は転生者だ。何？厨二病乙？残念ながら俺はそんなじゃない。特殊な能力なんてこれっぽちもない。嘘じゃねーよ。ほんとだよ？気がついてたら何か赤ちゃんに……。第二の人生、正直どーでもいいな非凡だろーが平凡だろーが。まあ今日も平凡な日々……。ん？なんだこの石ころ。

え・・・ここどこ？そしてオメーは誰だ

俺は転生者だ。

何？厨二病？残念ながらはずれ。特殊な能力なんてこれっぽちもない。死んだと思ったらなんか赤ん坊になってた。

まあ前世の記憶があるおかげで学校の成績は上のほう、勉強しないでいいから体を鍛えたり色んな武術を学んだり・・・いや我流だから学ぶもくそもないんだけど。

友達のはつきり言っていない「なんであんな奴が頭いいんだ」とか妬む奴が大半だったからな。まあ見た目はごくふつーの顔立ちだからな。イケメン（学校では結構強いらしい）やろぅが俺に喧嘩吹っ掛けて来たから返り討ちにしたり、プライド高い奴をボコボコにするって楽しい（笑）

高校？めんどくさいから言ってねーよ。つーか働いてる。親いねーし。小さい頃にポツクリ。

仕事はバイトしたりバイトしたり・・・ほとんどバイトだけど。

まあ、平凡そのものってきな感じかな。非凡だろーが平凡だろーがどっちでもいいんだけどね。

今日もバイトが終わって帰る途中だ。

「ふあああゝねみーさつさと帰って寝よーつと、ん？」

と視線を下にずらすと変わった石ころ？があつた。
不思議に思い拾ってみた

「何これ？なんかの石ころあれかドラゴン　ルか、それともF
の魔石か？マテ　アか？」

と、くだらない思考をしていると突然、

「え、ちょ、何か光りだしたんですけど、え俺願ひ事何もいつてね
ーよ、え、ちよつと、ま」

石ころ？が突然光りだし俺はその光に包まれた。

光が収まり目を開けると、

「え・・・ここどこ？」

見当たらない場所だったていうかなんかあやしげな機械があるしな
んかどこぞのアジトっぽいところなんか悪役とかがいそーなところだ
な、うん。

「どーしたらいいのこれ、つかー今日運ねなー俺、二日酔いで頭ガ
ンガンするしバナナの皮踏んですっ転ぶし、はあゝ。」

最初のは自業自得だろ、て言うか未成年酒飲んでいいのか。

「ていうーかさっきからサイレンうるせ　なんでも「見つけたぞ、侵入者！」え？」

と声がした方向をみると手足から刃ばいのを付けた全身タイトの女性がこっちに向かって

襲いかかってきました。（笑）

「ぎゃあああああああああああああ！！！！？」

え、何この状況だれかおしえてくれエエエエー！！いや確かにけつこー悪いことしたよ自動販売機の下にある10円玉とか拾ったり酒飲んだりしたけど何でおそわれるのー！！！！！！？？？

と、必死に逃げます（笑）

「待て！」

「待てと言われて待つ奴はいねーんだよ！！っーか襲いかかってきてるのに待ったらおかしーだろふっー！！」がこちらの言い分など無視して

「ふん！」思いつき殴ってきました。（笑）

が、

「な！？」

俺はそれをかわし殴ってきた腕をつかみそのまま前に投げた。全身タイツの女性は驚いたものの受け身を取りこちらを睨む。

「貴様何者だ？」

いやそれこっちのセリフだから

え・・・ここどこ？そしてオメーは誰だ（後書き）

と、ま こんな感じで書いてみたいと思います。
暖かい目で見ていただけるとうれしいです。
主人公の名前？これからだけどなにか？（笑）

管理局？魔法？ロストログア？・・・だめだ全然わかんねーよ（前書き）

テスト前なのに何やってんだろう俺（汗）

管理局？魔法？ロストログア？・・・だめだ全然わかんねーよ

はいはいどーもはじめまして山本健一だよ。

今の状況を説明しよう。

- 1、石ころ？拾う。
 - 2、石ころ？が突然光る。
 - 3、気が付いたら知らないところ。
 - 4、サイレンうるさい
 - 5、手足に刃ぱいのを付けた女性に襲われる。
- 今ここ

え・・・俺なんか悪いことした？（汗）

「貴様何者だ？」

いやそれこっちのセリフ

「いやそれこっちのセリフだからね。いきなり襲いかかってきたのそっちだし。つーかここどこよ。」

辺りを見回す俺。ほんとどこどこよ。

「管理局の者か？」

え？管理局？

「管理局？何それ食べれんの？」

「管理局を知らない？魔導師ではないのか？」

え？今この子なんていった？魔導？わけわかんねよーちょっとていうか話についていけなんだけど？

いろいろ聞こうと思った瞬間

「捕まえた〜。」

また別の女性・・・ていうより女の子のほうが正しい気がする。まあその女の子の声が聞こえたと思ったたら地面から水色ばい髪の女の子が俺の脚をつかんだ。

そこまではよかった。(いや良くないけど)

ただいきなりつかまれたものだからバランスを崩してしまい、そのまま前へ・・・

[illegible]

地面とキスすることになりましたとき（笑）

数分後

「おおお・・・いてえ・・・鼻が・・・」

「あはは・・大丈夫？」

「大丈夫じゃねーよ。鼻がすっげーいてーし、殴られそうになるは、はあー今日はとことん運がねーなー。」

あの後どつかの一室に連れてかれ所持品とかさつき拾った石ころ的な物を持って行かれた。所持品つっても携帯と原チャリの免許と財布あとは・・ジャンプだ。なにその歳でジャンプ？ バツカヤロージ

ヤンプは大人から子供まで読めるおまけに角を使えは武器になるすぐれもなんだぞ。なに？まるで銀さんみたいだって？まああごがれてるっちゃあごがれてるな。この世界には連載してなかったけどな。

「貴様、管理局の者ではないのか？」

とさきほど俺に殴りかかってきた青っぱい髪をした女性が聞いてきた。

「だーから、さっきから言ってるだろ。知らないって。っーか管理局って何？あれかフリー イソンか、秘密結社かそれとも宗教団体ですかそれともマフィアですかこのやロー。」

「本当に知らないのか・・・？」

あもーなーにこの状況っーかいつまでまちゃーいいわけよ。と頭ん中で考えごとをしていると

「やあ、待たせたようだね。」

すると白衣を着た紫色の髪をした男性と隣には薄い紫？色をした髪的女性がいた。

「自己紹介をしておこう、私はジェイル・スカリエッティ、隣にいるのはウーノ私の秘書だ。」

白衣を着た 胡散臭い匂いがぶんぶんする奴がスカリエッティで、隣にいるのが ウーノね。

「えっと、山本健一です。」

「キミが拾ったやつを調べさせてもらったよ。」
とスカリエッティが取り出したのは

「あ、さっき拾った石ころ。」

「まあこの石ころが時空転移型のロストロギアだとわかったよ。」
え？ロストロギア何それ？全然話についていけないんだけど。

ほんと、今日は運がね
なーおい。

ハア・・・

管理局？魔法？ロストログア？……だめだ全然わかんねーよ（後書き）

オリジナル展開でも作ろうかな

後、他の転生者はなのは組です。チートです。神から何か能力もらったり膨大な魔力をもらったりしてます。

健一はどっちかっていうと努力チート？

銀さんをワンランク下げた感じ？
でもチートってわけでもない。

主人公設定・・・・・・・・・・なんかいい

名前：山本健一

性別：男

容姿：顔は中の中、髪は白、目は黒、髪型は天パー（笑）

得意な武器：刀・銃（何でも使えるが出てる2つが一番得意）

好きな食べ物：クリームソーダ

好きな物：家族 ジャンプ

嫌いな物：組織 警官 偽善ぶってるやつ

身長：177cm

体重：63？

魔力：A+

バリアジャケット

BJ：銀さんが攘夷戦争に出てた時の格好

魔力光：白

死んだと思ったら赤ちゃんになっていた。おかげで精神年齢が40前後（笑）

母親は、健一を産んで死んでしまった。父親は世間一般では事故死になっっている。ここ重要

独学でいろんな武術を習得している。結構強い。

例えるなら、

銀さんの強さが100だとすると、健一は95。

性格も銀さんに似てるかも・・・

勉強は上の中

料理は中の上

最初に食べた人は全員「意外においしい」と言う

見た目もおいしそうなのだがなぜかそうなる。

大の酒好き未成年だけど酒を飲んでいいのかと聞かれるが

「精神年齢が大人だから問題ない!!」

といって聞かない

母親の方の祖父が鍛冶屋をやっていたため一人で刀を打てる

結構何でもできる

ただ幽霊がむっちゃくちゃ苦手

主人公設定・・・・・・・・・・なんかいまいち（後書き）

こんなかんじで（笑）

やっと状況把握できた・・・え・・・住まないかだって？（前書き）

テスト期間中なのに投稿する（笑）
俺ってバカ？

やっと状況把握できた・・・え・・・住まないかだつて？

「えーつまり俺はそのロストロギアでここに飛ばされて、あんたらは俺をその・・・なんだ管理局？の奴らだと思つて俺を捕まえた。で、いろいろ調べた結果別の世界からきた次元漂流者だと分かった。どっか間違つてる？」

「そのとおりだよ。疑つてすまなかつたね」

どーも健一です。今、やっと状況が分かった。かれこれ数十分訳が分からないことが続いて大変だった。

ハア・・・

別の世界に来たのは驚いた。おまけに魔法なんてものがあるなんて・・・何？お前が言えることか？バツカヤロー俺はただ単に前世の記憶があるだけだぞこん畜生。

あ、そうだ

「ところで俺つて元の世界に帰れんの？」

「それなんだが・・・」

非常に言いにくそうな言い方をしているが顔が笑つてるように見えるのは気のせいか・・・？

「このロストロギアは、魔力が空になつていてね、一度きりの使い捨てのようだ。」

ん・・・？

「つまり？」

「残念ながら元の世界には帰れない」

・・・

しばらく沈黙が続いたが健一が

「ふーん」

と、余りにも素っ気ない言葉に回りの女性達が少し驚いた顔をしていた。

「・・・感想はそれだけなのかね？」

「ああ」

「シヨックではないのかね？」

「俺にとっちゃぁ好都合だな」

うん、すっげー好都合。あいつらと関わらなくて済むしな。あ、でもジャンプが買えないのがちよつとなー。まあどーにかなるだろ。

「好都合？」

とスカリエッティが不思議そうに聞いてきた。

「ああ。気にしないでいいぜ。こっちの話だから」

まあー別に話すことでもねーしなー。でもやっぱジャンプが買えないのがやっぱなー。

俺がそんなことを考えているとスカリエッティが何か思いついたらしくニヤリと笑みを浮かべる。

やな予感・・・

「では健一、此処に住まないかい？」

「は？」

あまりにも意外な提案に健一は間抜けな声を出した。ウーノや周りにいる女性達も、驚いた顔をしている。

「ドクター！本気ですか？」

回りを取り囲んでいる女性の一人がそう聞いた。

「もちろんさ」

即答するスカリエッティ。

「一応聞くけど、なんで？」

「この場所を他の者に知られるわけにはいかないからね。」

うーん、と考え込む健一

どーすっかなーここに住むかーすっげー怪しいところだけどどこかにあてもねーしなー。

しばらく考えてから健一は

「まあ・・・そういうことなら・・・世話になるぜ」

「そのかわり雑用をやってもらっよ」

「かまわねーよ。世話になるんだ、それくらいお安い御用だよ」

「そうかいでは・・・」

では？

「ようこそ、山本健一」

と、両手を広げ言った。

なんか悪役みてーなやつだな

と思った俺は間違っていないはずだ。やっぱやめときゃよかったかな。

今日の運の悪さはほんと泣けてくるよ。

この後もなんかありそう・・・（汗）

やっと状況把握できた……え……住まないかだって？（後書き）

と、ス力家に住むことになった健
この後いたいどうなる！？

次回「尋常に勝負！！」
健「て、戦うの！？」

上等だゴラアアアアアーーーーー返り討ちにしてやらあア。……………

あの後俺は部屋に案内された。

セイン、て子が案内してくれた。

自己紹介でN o . 6 と言ったけどN o . て何ぞ？

まあ、後でききやいい話か。

と部屋でゴロゴロしていると

プシュ

と、扉が開く音がした。

「ん？」

健一はその音に気づき扉のほうを見ると薄い紫色の髪をした女性がいた。

「おまえ確か……」

「N o . 3 トーレだ」

あ、最初に会ったやつだ、と思い出したかのような顔をする健一。

「さっき言ったけど山本健一だ、で何か用？」
「ついて来い」

そう言って出でいくトール。

健一は頭をかきながら訳わかんねーといった顔しながら後をついていった。

「セイン、健一を見なかったか？」
「？うんや見てないけど。どうかしたの？」
「いや、部屋に行ったんだがいなくてな・・・」

一体、どこに行っただんだ？

「迷子にでもなっってんじゃねーの」

と、ノーヴェが言う。

「あらかた探したんだがどこにもいなくてな」

「そー言えばトーレ姉も見かけないね」

トーレもか？・・・・・・いやな予感がする

「あれ・・・みんなここにいたの？」

と、考え事をしてっているとディエチが来た

「どうかしたのか？ディエチ」

「訓練室が使用中になっっていたらみんなが使ってると思ったんだけど・・・」

訓練室が使用中だと？

部屋に健一がいない

トーレがいない

訓練室が使用中

まさか！！

「ちょっと！どうしたのチンク姉！」急に走り出したチンクに驚く
セイン。

まさかとは思うが・・・・

ハア・・・ハア

今 私は戦ってる

「やれやれいきなり・・・ハア・・・ついて来いて・・・ハア・・・言われついて来たら・・・ハア・・・戦えって・・・ハア・・・たく」

最初あった時から思っていた。こいつは強い
だから一度戦ってみたかった

結果は予想どおりだった

「このままでは・・・ハア・・・ちがあかないな」

「ハア・・・だな」

できれば使いたくなかったが・・・

「だから・・・ハア・・・奥の手を使わさせてもらっ!」

IS『ライドインパルス』

まさかと思ったが本当に戦っていたとは・・・！

「どうしたのチンク姉、急に走り出して・・・ってトーレ姉と健一！
？何してるのあの二人！？」

と、遅れて来たセインが声を荒げて言ってきた。

「・・・見てのとうりだ。戦ってる」

「はぁ！？戦ってるって・・・トーレ姉とか！？」

セインと同じ用についてきたノーヴェも声を荒げて言う。

「映像記録を見るからにして・・・20分くらい戦ってる」

「・・・20分！？」「」

「健一は・・・無事なの？」

デイエチが心配そうに聞く

「・・・さあな、ただ今は互角に戦ってるというか言いようがないな・・・」

「

その言葉を聞いて驚くセインとノーヴェ、デイエチ。

「健一っていったい何者なの・・・？」

私が知りたいくらいだ・・・

「あ、トーレ姉がIS使い始めたよ」

「流石にIS使われたら負けるだろ」

とセインとノーヴェが話し合うがはたしてどうだろうな・・・

ドゴォ！！

「かつはっ・・・！！」

腹を殴られ後ろに飛ばされるも受け身を取りなんとか体勢を立て直す

急に速くなった・・・！！

それだけじゃない一発の重さが増えている気がする

・・・奥の手ってそう言うことかよ

「くっ！！」

トーレのパンチを腕で何とかガードする

長くは持たない

！！

打開策を考えている暇はない

！！

そう思考するもののどうすることもできない健一

「終わりだ！！」

その声と共に目の前にトーレが現れ

ドゴォォ!!

トーレのパンチが健一の腹に入った

終わった

そうだれもが思った

しかし・・・

ガシッ

!!

健一は両手で殴ってきた腕を掴んだ
その光景に誰もが目を奪われた

健一は笑みを浮かべ
「っつかまえたあ!」
そして・・・

ドゴオオオオオオ!!!!!!!!!!

トーレの頭におもいつきり頭突きをくらわした

その衝撃にトーレはその場に倒れこんでしまった

その光景はチンク達にとって衝撃的なものだった
トーレはナンバーズのなかで一番強いといっても過言ではない
そのトーレに魔法や能力を使わずに勝ったのだ

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」
息が荒い健一

「ハア・・・俺の勝ちつつうことでもいいか?・・・ハア・・・ハア」

「ああ・・・」

そう言って手を差し出す健一

「ほら、掴まん」

「余計な御世話だ・・・」

差しのべられた手を払うトーレ

「んーな体で無茶すんなって」

強引にトーレの手を掴む健一

「余計なお世話だと言ってる!!」

掴まれた手を払おうとするトーレ

「ちょ、ま、そんな強引に、あ」

トーレが強引に手を振り払おうとした拍子に健一がつかまずいてしまい

「なっ!!?」

そのままトーレの胸の谷間に埋まってしまった

「・・・え?」

健一はなにが起きたか分からないといった状況である

チンクは、口をポカンとあけ、

セインは、あちゃーといった顔をしている

ノーヴェは、茫然とし

ディエチは、顔を真っ赤にしている

「なっ／＼／＼／」

トーレは顔を真っ赤にし

フラリと立ち上がり拳をプルプル震わせ

「いや、ちょ、ま、まてって、すこs」

「なにをするーーーー！！／＼／＼／」

「ギヤアアアアーーーーー」

おもいつき殴られ壁にぶつかった

「ほんと……今日運がねーな……」

ガク

余談だが、あの後トーレと健一はウーノにこっぴどく叱られたらしい

上等だゴラアアアアアアーーーーー返り討ちにしてやらあア。……………

一日三回……………おまけにテスト中……………I amクレイジー（笑）

他の転生者の出番はかなり後かも……………

こんな犬のえさといっしょだ！！買い物にくぞコリア（前書き）

不定期と言いつつ更新する

実はこれ俺のPCじゃないんです

親のなんです

MYPCほしい・・・

こんな犬のえさといっしょだ！！買い物にくぞゴラァ

「と、言うわけで買い物にいきてもーから外出許可よこせ」

「何がというわけなのがサッパリわからないんだがね・・・」

と冷静に答えるスカリエッティ

なぜこうなったかと言うと

〽回想〽

「何これ？」

「夕食だ」

ときっぱり答えるチンク

ちなみに目の前にあるのは

某CMに出そーなカロリーメイト的な物

クッキーぽいなにか

そして

水

ドンー!!

「ふざんけゴリアアアアアアアアアアアアアアアアア——」

「！！！！！！！」

机に両手を思いつきり叩きでかい声を上げる健一

いきなりでかい声をあげたから全員ビクツと体を震わせた

「何これ！？どー考えたって夕食じゃねーよこれ！？朝寝坊して軽食で済ませるサラリーマンと同じじゃねーか！？栄養バランスが悪すぎるわ！！こんな毎日食ったら体壊すわボゲがあー！！」

「それなら問題無いわよ」栄養はちゃんどあ「黙れ眼鏡！！」

「いいかテメーら！！栄養だけじゃねえ！！見た目も大事なんだよ！！！！こんなの俺は食事と言わねえ・・・・・・３時のおやつだ！！料理位しろや！！」

「しかし・我々はりょうりができないn「はあ!!?」ビクッ！
！」

「何！？こんなに人数いるのに誰もできねーのかよー！！情けねーなおい！！」

「『『『『『うつ．．』』』』』』
と反論ができない6人

「ハア．．．仕方ねーなたく．．．俺が料理すつから食材持つてこい」

「え．．？おまえ料理できるのか？」
と意外そうに聞くノーヴェ

「それくれー誰だつてできんでろーが。ほらばさつとしてねーでさつさと持つてこい」

「それなんだが．．．その．．．」

「あ？」

「食材が．．無いのだ．．．」

「はあああああ！ ああああああ！ ああああああ！ ああああああ
　ああああ——！！！！！！！！？ ？？？」

（おと）

とアジト全体に響き渡るくらいでかい声で叫ぶ健二

ちなみに研究室にいたウーノ達にも聞こえたらしい

〽回想終了〽

「あんなのおれは夕食だなんて認めない・・・あれは犬のえさ・・・いや、犬のえさのほうかもっといい・・・」

「と、とりあえず落ち着きたまえ健一（汗）」
と、余りの気迫に引き気味のスカリエッティ

「そつだな少し落ち着くか（キリッ）」

「落ち着くのが速くないかね・・・」
と、ツツコムスカさん

「つーわけだから、食材と俺のほしいもん買いたいから金寄越せ。
あと俺この世界の文字わかんねーから案内人よこせ」

「随分とはつきり言うね・・・というか今さりげなく自分のほ
しいもの買いたいと言わなかったかね？」

「いいからさつさとしろや」

「・・・まあ金のほうなら問題ないよ、いくらでも出そう。
案内人は・・・そうだな、確かノーヴェが空いてたから彼女に頼
もう」

ノーヴェ？

ああ、あの赤毛か。

「では、ノーヴェを呼んでいただけますので少々お待ち下さい」

そういつて研究室を出ていくウーノ

ノーヴェねえ・・・あいついつつもツンツンしてるしなー。デレてるとこ見てみてーな、そーすりゃーツンデレになる（笑）

けどあいつとあんまはなさねーけど...ま、大丈夫だろ

つーわけでやってきました ミッドチルダの首都：クラナガン・・・ミッドてきいてF 7のミッド ルを思い出すのは俺だけ？

そうそうノーヴェの格好だけどふつなんだよなー。ジーパンにTシャツ・・・て、ちょっと待てなんでふつーの服があんだよ、だったらアジトでもそれ着てろよ。目のやり場大変なんだぞこっちは！あれか全身スーツ！！パジャマの公式がテメーの頭には入ってんのかこのやローー

つっても精神年齢が40前後の俺じゃ発情しねーけどな・

「おい、なにぼさつとしてんださつさといくぞ」

「いわれなくてもわーてるよ」

まあいつか（ いいのかおい）

「っと、買うもん買ったしそろそろかえるか」

「ああ・・・」

何とか買い物が終わった・・・

ん？お前のほしいもん買ったのはなにかって？

着物と木刀だよ。

売ってるか心配だったけどあつてよかったぜ

やっぱ日本人は着物だろ。

ちなみに某侍と同じだ。

木刀？某侍に憧れてんだよ。

原作ほとんど忘れたけど・・・

『続いてのニュースです。また人斬りです』

ん・・・？

『最近、ミッドチルダで魔導師を狙う人斬りが出ています。みなさ

ん夜外出はくれぐれも・・・」

人斬りねえ・・・物騒だなおい

まあ関係ねえな

「おい、とつととけるぞー」

「あ、おいまてって」

ニュースに見入っていたノーヴェが我に返り健一の後を追う

「くっくくくくっくかなかおもしれえじゃねーかあの男」

不敵に笑う男の影があるとも知らずに・・・

こんな犬のえさといっしょだ！！買い物にくぞゴラァ（後書き）

つーわけでオリジナル展開『人斬り』を入れました

銀魂ネタですハイ

他の転生者は原作にない展開に驚くでしょうねえ

原因

神「つまらないからオリジナル展開入れたらおもしろそうと思ったから」
です

P S : 感想書いてくれるとすごくうれしい（泣）

あ、デレた。こいつツンデレだ。(前書き)

テスト終わりたいやっっあぶっうううー

あ、デレた。こいつツンデレだ。

「っと、帰って来たぞー」

「あ、健一。おかえりー・・・色々買ったね」

「おうよ」

まあ、確かに色々買ったな

卵だろ、あと野菜、肉、調味料etc・・・

両手いっぱいレジ袋がある。

「あ、そうだ。ドクターが帰って来たらラボに来てくれって言ってたよ」

「あ？あいつが？・・・仕方ねーな・・・セインこれ冷蔵庫にしまつといてくれ」

「いいよ」

手に持っているレジ袋をセインに渡す。

「じゃ、また後でね」

そう言って手を振るセイン

・・・セインって子供っぽいな、姉って感じがしねーな全然

「おい、帰ったぞー」

「やあ、お帰り。ほしい物は手に入ったかい？」

「まーな」

そう言って手に持つてゐる木刀と着物を見せる

「で、用つてなに？」

「預かってた携帯を返すよ」

携帯を渡すスカリエッティ。

そーいば最初会ったときに預かってたっけ

「・・・ああ、すっかり忘れてたわ。で、どこをどう改造したんだ？」

「まず、私やナンバーズと連絡が取れるよう通信機能を付けたよ。モニターも出せるようにしてるから試しにしてみるといい」

「えーっとどれどれ・・・おお！！すげえ！！・・・これこそとこーなつて・・・これがこーなるわけか・・・」

「説明のほうは必要なさそうだね」

「まーなこつ言うのは得意だぜ。親父が物理学者だったからな」

「・・・だつた？」

疑問に思つたのかスカリエッティが質問した。

「んーまー話せば長くなるけどな

」

「

っーわけだ。」

「・・・なるほど、だから好都合といったんだね・・・すまない事を聞いたね」

「気にすんな。どーせ昔の話だ。」

と鼻をほじりながらどうでもよさそうな顔をする健一

「できれば、生きているうちに君の父親に会いたかったね・・・」

「確かにオメーと親父はきがいそーだな。」

笑い飛ばす健一

「つとまあこの話は終わりしてそろそろ戻っていいか？飯作んなきやいけねーから」

「ああ引きとめて悪かったね、もう戻っていいよ。あ、それと木刀を預かってもいいかね」

「何で・・・？」

「ちょっと改造をね」

と不敵な笑みを浮かべる

「・・・変なのつけんなよ」

「ちゃんと原型はとどめるし、頑丈にしたりするだけさ」

「まあ、別にいいぜ」

木刀を預け部屋を去る健一

場所は変わり食堂に一人の男の影が・・・

「さてと、作るとしますか」
と、意気込む健一

にしてもなにつくつかない・・・まあ簡単にオムライスにでもすつか

そういつて冷蔵庫から卵を取り出し、殻を割りボウルに入れる。

「~~~~」

いやーなんかテンション上がってきたから一曲いくかー

「曇　　ピー　　を~~~~　自主規制　て、　　ピー　　は~~~~」

曲はもちろんDOESの曇天だ・・・じつは転生して声がDOES

のヴォーカルの人の声になってたんだよね

これはこれでうれしいんだよね

}

「健一って歌うまいんだね……」

「いやわかんねーよ!! ほとんど ピー しか言ってるねーじゃねーか」

黙れツンデレ

「誰がツンデレだ!!」

「誰に言ってるの?」

と料理してる様子が気になって見に来たセインとノーヴェが聞いて

るとも知らずに……

「っと、まあこんなもんか」

「おお、おいしそう!!」
と目をキラキラさせているセイン。

「これは……何？」

尋ねるディエチ

「オムライスだよ。ご飯にケチャップかけて炒めてその上に焼いた卵を乗せただけだよ、まあこれくらい初心者でもできるだろ」と、簡潔に説明する

「よし、じゃー早速」

「ちよとまてい!!」

「な、何だよ!？」

食べようとしたノーヴェを止める健一

「食べる時には、最初に『いただきます』って言うてからだ」

「何だよそれ？」

と疑問をぶつけるノーヴェ

「食事に対する感謝の言葉みてえなもんだ。ちなみに食べ終わったときは、『ごちそうさま』だ。」

「そうか。じゃあ健一の言う通りにするとしよう」
チンクの言葉に他のみんなも同意した

「……………いただきます……………」

全員声をそろえて食べ始めた

「うん、意外においしい」

「意外においしいわね」

「意外においしいな」

「・・・意外においしい」

「意外においしいじゃねーか」

「意外においしいではないか」

と、全員「意外」と言う言葉がある

「んーだてめーらそんなに俺が料理下手そうに見えるのか、あ？ゴ
ラア」

「いや、そー言うのじゃないんだよ。なんて言うか、こう・・・そう
いう味なんだよ」

「どんな味だよ！？意外な味ってなんだよ！？つーか意外な味って
どんな味だよ！？」
声を荒げる健一

「まあまあ、落ち着きなつて」
と宥めるセイン

食事が終わった後、ゴロゴロしていると

「あ、そうだノーヴェ」

「何だよ」

と思い出したかのようにいう健一

「今日買いもん付き合ってくれてありがとな」

「な、なんだよ急に」

「いや、付き合ってくれたから一応礼を言っておこーと思ってな・・・」

「べ、べつにーおめーの為何かじゃねーからな、ウーノ姉に頼まれたからだ・・・か、かんちがいすんじゃないよ／＼」
と、顔を赤くしながらそっぽを向いたノーヴェ

「にやにや」

「な、なににやにやしてんだよ！！気持ち悪い！！」

「ハイハイ、ツンデレツンデレ。」

「だ、誰がツンデレだ」

反論するが全然説得力がない

「ふあゝ・・・さてと俺も風呂入るとするか。もう全員出てるだろうし・・・」

「おい無視すんな！！」

「はいはい。あ、そうだ明日外出許可もらおう。久しぶりにパチンコにでも行くか」

「はあ？」

「いやーなんか当たりそーな予感がするんだよ。こう・・・何か」

そう言って手でパチンコする動作をしながら立ち去る健一

$$\begin{array}{c} \triangle \\ \equiv \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \end{array}$$
$$\frac{\angle}{=}$$

手に何か柔らかい感触があり目の前をみると

トーレがいた

「なっ／＼／＼／＼!!」

顔を真つ赤にし目が渦巻き状態になっている

トーレの胸は結構でかいだからつい何回も触ってしまう健一

(あ・・・やべ・・・)

と思考するもすでに遅し

「なにさらすんじやああああああ——!!」

「ギヤアアアア——————————」

きれいなジャーマンスープレックスを喰らった健一

「パチンコいくのやめよ……………」

あ、デレた。こいつツンデレだ。（後書き）

つーわけで二度目のラッキーすけべ

次郎長さんごめんなさいジャーマン使っちゃいました

ネタが・・・尽きる

俺のクリイ ムソーダーアーーが――――!! (前書き)

ネタが尽きちゃうよ

俺のクリイ ムソオーダーが――――！！

健一がナンバーズと過ごしてる間

一方、ほかの転生者のほうは……

真っ白い空間に

4つの人影が

「よう。久しぶりじゃのお主ら」

「お、おまえは神！？なんでまた！？」

第一声を上げたのは八神信也、名前から察して
やての兄である。

八神は

「いや、お主らに伝えなければならぬことがあつてな……」

「伝えなければいけないこと？」

疑問投げるのは

衛宮士郎、転生者がよく選ぶ。

「原作にない展開が今後あるから気をつける」
あつさり言う神

「はあ！？ちょ、どう言うことだよ！？」

声を荒げて言うのは

神谷霧雨（厨二病な名前www）

「そのまんまの意味じゃよ」

「いや、そのまんまって・・・」

「あとそれから・・・」

「まだ何かあるのかよ・・・」
呆れ気味に聞く士郎

「お主ら以外にもう一人転生者がいる」

「「「！！？」」「」」

「けど、そいつはお主らと違ってチートな能力はない、つまり
普通の人間として生まれとおるぞ」
普通の部分をやけに強調して言う神

「まあ、伝えることは伝えたからじゃ！」
手を振って答える

「「「ちよつと待てー!!!」」」

転生者たちの声も虚しくその場所から消えていく

「ふう、逝ったか（字が違う）。」

ま、いうこと言っただしさつさと・・・

ん？なんで原作にない展開があるかって？そんなもん

「オリジナル展開があつたほうがおもしろいじゃん」

「じゃん」じゃねーよ。そんなに暇なのかおめーは。

「暇じゃないぞ。アニメ見たり、マンガ読んだり・・・」

暇じゃねーか

「おお！もうすぐ見たいアニメが始まるー!!」

そう言ってテレビの前に行く神

「いやっふう!!銀魂、最高!!」

て、銀魂見てんのか――――!!!!

ちなみに、あんたの出番これが最後かも知れないから

「何じゃと!?!」

「ハア・・・」

どーも健一です。こっちの世界に来て3週間くらいだった。

なんとかこっちの世界の字も読めるようになったし、後デバイス？
つつたけ、スカリエッテイが作ってくれた。まさか自分に魔力素質
があるとは思わなかった・・・。

ランク？えっと・・・A+くらいって聞いたけど・・・A+って
いいほうなの？

答：いいほうですよbyアビス

まあそこら辺は特に問題ないんだよ。ただ、魔法の練習をしようとする時……

「健一、私と勝負しろ」

そう、何を隠そう

戦闘^{トレ}狂である

「いや、なんでさ」

「魔法の練習をするだろう？練習相手になつてやる」

「いや、おめーぜって そんなこと考えてねーだろ。頭ん中は戦いでだけだろーが」

ところで今何をしてるかというところ、デパートで買い物しようとしていたのだがデパートにある喫茶店につられクリームソーダを注文してる最中である。

「おまたせいたしました。クリームソーダ……」
とクリームソーダを受け取ろうとしたその時、

「全員動くな!!!」

とでかい声が聞こえた。

見てみると銃やら剣やらいろんな武器持ってるやつらがいる

コスプレ集団か？あの格好（バリアジャケットです）

なんだ？テロリストか？まあかんけーねーなど、思ってた目の前を見たら

こぼれたクリームソーダがあった

「全員動くんじゃないやねえ！！死にたくなかったらおとなしくしてろ！」

！」

テロリストの一人が叫ぶ

人々が悲鳴を上げる

「このデパートはおれたちが占拠した！！全員大人しくしてもらおうか！！」

人質を一か所に集めようとする

が、

「ぐあっ！！」

一人のテロリストが悲鳴を上げた

「！？な、なんだ」

悲鳴のしたほうを見ると
た。

木刀を持った着物の男がい

「て、てめえ！何もんだ！！」

テロリストの一人が怒鳴った

「なにもん？そりゃーこつちのセリフだつつのー。いきなりぞろぞろと現れやがつて、あれかおめーら宗教団体の方たちですかコロヤ口、それともコスプレ軍団ですか」

「てめえ！！ふざけてんのか！！」

「ふざけてんのはそつちのほーだろーが。ほら見ろ、てめーらが暴れたせいでおれのクリームソーダがこぼれちゃったじゃねーか」

「さつきから舐めやがつて！！」

健一の言葉に切れたのか一人が魔力弾を撃ってきた。

危ない

そつ誰もが思った。だが・・・

バシイイイイン！！

健一は木刀でそれを弾いた

「な！？」

テロリストは驚き少し硬直してしまった。

その隙に

スパアアアアアアン！！！！

テロリストの間を通りながら木刀をふるった

テロリスト全員がその場に倒れてしまった

人質になっていた人達から見ればとても衝撃的な光景だった

魔法も使わずテロリストを倒したのだから

「おい、その店員」

「ハ、ハイ」

ボーっとしていたところ急に話しかけられたのでびっくりしてしま
った店員

「クリームソーダこんななっちゃったから代金払わねーからな
じゃ」

「え．．．」

あまりにも意外なことを言ったので固まってしまった

そう言った後、健一はその場を去った

店員たちが我に返ったのは、健一がデパートを出てからの話だった．
．
．
．

「
すね
つまり、その男の人がテロリスト倒したんで

「はい
」

はじめましてフェイト・テストロッサです。今事情聴衆をしています。

「とてもすごかったですよ、木刀だけであつという間に倒してしまつたんですから」

聞いたところによると木刀を持った男の人がテロリストを倒したみたいなんです。

・・・質量兵器は禁止されてるんだけど・・・木刀なら大丈夫なのかな・・・

「えっと、その男の人の特徴を教えてくださいか？」

「特徴ですか・・・変わった服を着てましたね・・・髪は黒でした。」

髪が黒？めずらしいな、ミッドじゃ黒髪の人はい少ないから・・・

「あ、それと」

それと？

「クリームソーダを注文しました」

・
・
・
・
・
ハイ？

俺のクリイ ムソーダーアーが――――!! (後書き)

主人公魔法使えるようにしました(笑)

デバイスの名前どーしょ

ていうかデバイスのしゃべりもどーしょ
英語でやんのむずいしなー

あと、プレシアは健在にしました

リインフォースは未定

今回は、なのは組だ！つまんねー人は見なくてもいいぞ！！（前書き）

ネタがーないーないー

今回は、なのは組だ！つまねー人は見なくてもいいぞ！！

「凄いね、その人。だって魔法も使わずに倒したんでしょ」

栗色の髪をポニーにしている女性、高町なのはが凄そうにしゃべった。

「うん。でも木刀って駄目なんじゃないのかな・・・」

金髪でロングの女性、フェイト・テストロッサが疑問交じりに言った。

「私はギリギリセーフだと思うんやけど・・・」

柔らかい関西弁で話す女性、八神はやては大丈夫そうに言う。

「さっきからなんの話をしているんだ？」

とその会話に入ってきたのは八神信也

転生者である。

「あ、お兄ちゃん。いやね、木刀だけで犯罪者をスパパパン、て倒した人があるんやよ」

「スパパパンってなんだよ・・・」

と、ツツコム神谷霧雨

こいつもt(r y)

「にしても木刀だけで倒すなんてすごいな、その人の名前は？」

名前を尋ねる人物

衛宮士郎

「それが名前も名乗らずそのまま立ち去っちゃったんだって」

「名前も名乗らず去るなんて、かつこええな」

感心する狸^{はやて}

「こういう良いニュースがあるといいよね」

楽しそうにいう魔王^{なのは}

「そうだね。最近物騒な出来事が多いもんね・・・」

「あの人斬り事件まだ解決してないのか？」

「うん・・・神出鬼没、かつ目撃もされない・・・地上部隊も必死になって捜してるみたいんだけど・・・」

「それでも見つからない、と」

「うん・・・」

信也が言ったことに頷くフェイト。

「魔導師を狙う人斬り・・・いったい何が目的なんだろう・・・」

疑問を覚えるのは。

「・・・考えても仕方ない、今は人斬りを捕まえることだけ考えよう」

「そっやな・・・」

霧雨の言葉に頷くはやて。

（原作にない展開があるって神は言ってたけどこのことなのか？）

そう考える士郎

しかし、彼らは知らない。

現実がどの様なものか

現実がどれほど醜いか

今回は、なのは組だ！つまんねー人は見なくてもいいぞ！！（後書き）

つーわけでなのは組を書きました

リインは健在させることにします

デバイスの名前プリーズ・・・

次回からSTSに入っぞ！！更新遅くなるけどきにするな！！（前書き）

零時さんデバイスの名前の案を出していただきありがとうございます。

ツクヨミを採用させていただきました。

それではどうぞ。

次回からSTSに入っぞ！！更新遅くなるけどきにするな！！

「ふゝいい湯だねー」

「おっさんくせーぞセイン」

「ぷっ」

ノヴェがセインの発言をおっさん臭いと言ったことに思わず吹いてしまったディエチ

「ちよっ、酷くない！！？」

「おっさん臭い・・・くっくっく」

トレも笑いをこらえている

「うえゝん、チンク姉ゝみんながいじめるゝ（泣）」

「よしよし・・・」

チンクに慰めてもらっセイン

・・・姉って感じが全然しませ ん（笑）

「にしても、健一がここに住んでからラボ全体の雰囲気が変わった気がする・・・」

「確かにそーかもな、ウノ姉は、前より明るくなった気がするし、クアットロ姉も健一とよくしゃべるし、ディエチもよくしゃべるよーになったしな。ドクターも前に比べると変わった気がするしな」

「けど、あの高笑いに残ってるけどね」

「おまけに健一が不幸な目に会ってる時だけにな・・・」

「クアットロと健一が話す内容もちよっと・・・」

こんな内容

「んーだと!!このダメガネ!!」

「あなたに言われたくないわよ!!この天パー!!」

「やんのかゴラァア!!」

「上等よ!!」

「あれは話すというより、喧嘩だ」

「確かに・・・」

頷くトレ

「トレ姉も変わったよね」

「私がか？」

「だって健一に胸触られた時、顔を真っ赤にして」

ゴチイイイイイン！！！！

「何か言ったか・・・」

「いえ何にも言ってません・・・（泣）」

頭に大きなたんこぶが出来たサイン

「まあ、健一のおかげでこうなったわけだ」

微笑みながら言うチンク

「それに・・・あんな話されたらね・・・」

「銭湯奇人？」

「ちがう！！戦闘機人だ！！」

「どっちでもいいじゃん」

「よくない!!」

ボケる健一とツツコムチンク

「なんとも思わないのか？」

「何が？」

質問の意味が分からない健一

「私達は闘う為に生み出された戦闘機人だ。その気になれば人を殺せるんだぞ？おまえは怖くないのか？」

その気になれば人を殺せる・・・ね

「そんなの誰だってそうだろう」

「なっ!？」

予想外の発言に驚くチンク達

「戦闘機人じゃあ無くたって人は殺せるんだよ。心臓を銃でぶち抜けば死ぬし、首を剣で跳ね飛ばせば死ぬ。・・・・・・・・たとえオメーらが戦闘機人だろうがカンケーなんだよ。」

あっさりと言う健一

「確かにそうだけど・・・・」

腑に落ちないセイン

「むしろ俺のほうがかわがられるかな・・・」

「・・・どういうことだ？」

「俺は

」

「あんな話聞かされたら悩んでたのがバカらしくなっちゃたしね・

」

「最後ので台無しになったけどな」

ぶっちゃけ考えるのがめんどくさいだけなんだけどな

「大物なのか、バカなのか・・・一体どっちなんだ」

「両方なんじゃない？」

笑い合うチンク達

「・・・てめーは何してんだ」

「ジャンプ読んでる」

ノヴェが風呂を出て最初に見た光景が
「健一」

ジャンプを読んで

どこから仕入れたのか何冊か増えている

「ていうかどこから手に入れたんだ」

「秘密」

「・・・ツクヨミ、何か知ってるか」

<I don't know>

「ちよとまで！！なんで一緒にいるデバイスがしらねーんだよ！！」
声を荒げて叫ぶがだれも答えてくれません

「うるせーぞ、ツンデレ」

「誰がツンデレだ！！」

と
ッ
コ
ム
ノ
ヴ
ェ

ストーリー
物語は始まつたばかり

その先にあるのは

憎しみ

欲望

復讐

それとも

次回からSTSに入っぞ！！更新遅くなるけどきにするな！！（後書き）

健「なにこの厨二臭い終わり方？」

ア「うるせーなほっとけ」

セ「ネタが尽きてきてるからねー」

ノ「けっこピンチなんだよな」

ア「否定できない・・・」

タイトルいちいち考えるのってめんどくさいよね（前書き）

短いですがどうぞ

タイトルいちいち考えるのってめんどくさいよね

『と、言うわけだ。君たちには人斬りについて調べてほしい。これ以上、秩序を乱すことがあってはならんからな』

「分かりました。やり方はこちらのやり方でさせていただきますが、かまいませんか？」

『かまわん。一刻も早く見つけてくれればかまわない』

「分かりました。では」

『では、失礼する』

通信が切れ椅子に座るスカリエッティ

「お疲れ様ですドクター」

そう言って紅茶を差し出すウーノ

「全く、面倒事を押しつけてくれ老人たちは・・・」

持ってきた紅茶を受け取りつつ愚痴をウーノにこぼすスカリエッティ

「人斬りイ？」

「そつだ、例の老人達がね……」

「大変だな」

「そこでだ、君にも手伝ってもらいたいんだ」

自分が指されたことに驚いた顔をする健一

「え、何でおれ？」

「ナンバーズは今忙しくてね……空いてる人がいなくてね」

頭をかきながら仕方ねーなといった顔する

「分かったよ。で、俺は何をすればいいんだ？」

「君にはNO・2のドウ エと一緒に行動してほしい」

ドウ エ？誰？

「ああ、そういえば言っけなかったね。ドウ エは潜入捜査をしていてね、アジトに戻ることは殆どないからね。君が知らないのも無理ないだろう」

いや、それ先に言えよ。ていーつか潜入捜査ってどこよ。あ、管理局か

そうそう此処に住み始めてから半年くらい経ってんだよ。何？速すぎだって？作者の都合なんだよ。

管理局のことはこのスカリエッティ（マッドサイエンティスト）から聞いた。

最高なんちゃらのことも

ん？オメーにとって管理局は何かって？

管理局〃税金泥棒

まあ、その話はおいとして、ナンバーズが一人増えた。

ウエンディって言って「ッス」が口癖だ

・・・何でさ（笑）

「ドウ エにも話は付けておくから集合場所でおちあってくれ」

「わーったよ」

俺はアジトを出て待ち合わせの場所に向かうため街を歩いていた
>Please turn at the next way o
n the right.<

「りょーかい」

ツクヨミの言うとうりに歩いて集合場所に着いた

そこは・・・

でっかい高級マンション的な物があった。

何ここ？どっかの会社？あ、管理局の寮だったわ。

・・・どー考えても税金の無駄だろ！？何でこんなでけーんだよ
！？何で高級なんだよ！？すっげー腹立つんですけどぉ！？

そんなことを考えていると緑色で長髪の女性が近付いてきた。

「あなたが山本健一さん？」

「ん？．．ああ、そうだけどあんたがドウ　エか？」

「ええそうです。NO・2のドウ　エです。よろしくお願いします」

「おー、よろしくな」

軽く挨拶をし本題に入る二人

「管理局の方じゃ何もねーみてーだな」

「ハイ」

「んー．．．」

考え事を始める健一

「どうかしたんですか？」

「ここはやっぱ、あそこに行くか．．」

「あそこ？」

そう言つて二人が来たのは裏通りにある一軒の怪しげな店

「ここ・・・ですか？」

「ああ。」

少々不安を抱きつつその店に入るドウ エ

「よお、久しぶりに来てやったぜ」

「おや、誰かと思えば珍しいお人じゃないか」

返事をしたのは、中年の男で不格好な服を着てるロイ

「こちらのかたは・・・」

「こいつはロイ、情報屋だよ、こいつとの関係は・・・まあ今度話すよ」

ドウ エの質問に答える健一

「今日は人斬りについて聞きたいんだろう？」

「な！？」

自分たちがここに来た理由を当てられたので驚くドウ エ

「情報屋をやってるんだ。それくらいわかるよ」

「話が早くて助かるぜ。つーわけでさっさと知ってること教えろや」

「やれやれ・・・人斬りの正体に関しては分からないけど人斬りの持つてる剣のことなら知ってるよ」

「剣？」

「剣？何で剣？」

「そいつの持つてる剣はね」

「まるで生き物みたいな剣だそうだよ」

タイトルいちいち考えるのってめんどくさいよね（後書き）

オリキャラ出しちゃいました。

まあ、今後も出る可能性が高いですが

人斬りって言っても実際現実じゃほとんどないよね（前書き）

オリキャラたくさん出てくるけどOKならどうぞ

人斬りって言っても実際現実じゃほとんどないよね

『おや、健一じゃないか。君から連絡してくるということは何か分かったんだね』

「まあな」

その後、ドウ エと一緒にいろんな所を調べた結果、やばいことが分かった。

「人斬りの正体までは分からねーが、裏の人間が管理局に恨みを持つてる奴だつてことが分かったぜ。

デア・オリス、管理局の元技術局員だ。恐らく首にした管理局に復讐することが目的だろーな。」

スカリエッティはその話を聞いて納得いかない表情をしていた。

『しかし、その技術局員と人斬りの関連性が分からないんだが・・・』

「話はまだ終わってねーぞ。その技術局員と関係を持ってる奴がヤバいんだ。」

『・・・一体誰かね』

「S級犯罪組織『ヴェンテット』のリーダー、ラン・アーカスだ」

『！！！』

スカリエツティは驚愕の表情を見せる。

それもその筈、『ヴェンテット』は危険極まりない犯罪組織。テロはもちろん、管理局の魔導師も殺されたりしている。

『超』が付く位の過激集団のリーダーだ。

そんな奴と手を組んでるなんてヤバ過ぎる。

こつちに来てから半年の俺でも知ってるんだぞ。

「人斬りもその『ヴェンテット』の一員だろうな」

『それはまた厄介だね・・・』

「本当、どーすん」

クイツ

ん？

着物を引っ張られた感覚がしたので下を見ると、

ボロボロの服を着ていた少女がいた。

え？何この子？何でボロボロなの？ていうーかなんで左腕に鎖巻いてんの？

んでもって何でその先にケースみたいなのがあんの？

『どうかしたかね、健一？』

呆然としている健一に尋ねるスカリエッティ

「目の前にケースを持った少女がいる」

『ケース？・・・ああ、そういえば今日は『マテリアル』と『レリック』が移送される日だったね』

マテリ・・・？レリック？

『丁度いい。その子をアジトに持ってきてくれるかね？』

「あ・・・ああ、分かった」

通信を切り、左手に少女を持ち立ち去ろうとした時、

「！！！」

ガキイイイイイイン

殺気を感じて木刀を取り出し、目の前にきた剣を受け止める。

「ほお、やはり受け止めたね。最初見たときからおもしろそうな奴だと思っていたが・・・」

不気味な笑みを浮かべ喋り出す男

「てめえ・・・なにもんだ？」

片手で男の剣を抑えながら言う

「人斬り エース・ゼイオン」

「!!!」

人斬り この男が立て続けに魔導師を狙う人物

「くっくく・・・臭うね、あんたから臭う血の臭いがプンプンする・・・片手でやるにゃあおいしい人物だね・・・」

そう言つて剣をおさめるゼイオン

「殺し合いはまた今度に使用や・・・じゃあな・・・」

そういった後、ゼイオンは立ち去って行った。

「何もんだ・・・あいつ」

疑問に思いつつも、アジトに向かうことにした健一

「帰って来たぞー」

アジトに帰ってきた健一は取り合えず拾った幼女をベットに寝させ、ケースをスカリエツティがい

るラボに持ってきた。

「レリックが入ってるケースを持って来たぜ。幼女はベットに寝させてある。」

「持ってきてくれてすまないね。レリックはこちらでどうにかするから、君は休んでくれて構わないよ。」

「じゃ、そうさせてもらおう」

そういつて立ち去ろうとして、ドアに手をかけ時、

「そうだ、さつき人斬りに襲われた」

「！！大丈夫だったのかね」

心配そうに聞くスカリエッティ

「問題ねーよ。さつさとひいたしな、なまえは・・・たしかエース・ゼイオンで名乗ってたな」

「エース・ゼイオン・・・」

顎に手を当て、考え込む素振りをする

「心当たりがあるか？」

「・・・エース・ゼイオン。次元犯罪者で、無差別に人を斬ることから通称『人斬りゼイオン』などと、呼ばれている」

「そりゃまた・・・厄介な人物だな」

S級犯罪組織『ヴァンテット』そしてそのリーダーラン・アーカス

次元犯罪者 エースゼイオン 通称『人斬りゼイオン』

元技術局員 デーア・オリス

原作にはない展開

そして原作にはいないはずの人物

そして原作には程遠い

醜い争い

物語が動き出す

人斬りって言っても実際現実じゃほとんどないよね（後書き）

更新ムズくなります。

ネタが・・・

この世の中白黒はつきりしないのはいつものこと

「健一くこっちっす」

「おー」

どーも健一です。ただいまレリックを回収しにウエンディとアギトとノーヴェと一緒に出ています。

もう回収する必要はねーんだけど一応つてきな感じで。

アギトが何でいるかって？俺が頼んだ。何かあったらね・・・まあ、保険つてやつだ。

そうそうルーテシアだけど母親はもうすぐ目覚めるとか。

あのバカ（スカリエッティ）が利用するためにとか言っただけで騙してたらしい。

彼女の協力はもう必要ないとかなんとか

もちろんそんな時、

「何してんだおめえはーーーー！！！！」

「ぶふおああー！！」

おもいつきり顔面キックを喰らわしてやった。

あの後ルーテシアとアギトにすっげー謝った。

・・・まあそのおかげでアギトとは仲がいいって訳だ。

「お！！あつたっす！！これで回収完了ッス」

ウエンディがレリックを見つけたらしい

「おし、じゃあ帰るとする

危ねえ！！」

攻撃に一番速く気づいた俺は声を上げその言葉に気付き、かわす。

そして攻撃してきたのは

黒いガジェ

ットだった。

「黒いガジェット・・・だと？」

「こんなの知らないっすよ」

そのガジェットは、スカリエッティのではない、つまり別の誰かが作ったガジェットだ。

それにどっちかっていうと人型に近い形をしている

「なんだよ！！あれ」

「俺が聞きてえよ!!」

口論をしていると、黒いガジェットが腕に持っているビームーベ
ル的な物で攻撃してきた。

「くっ!!」

「健一!!」

健一は木刀でそれを受け止め、

「でやあ!!」

ビー サーベル的な物をはじき返し、腹の部分を木刀でおもいつき
り殴り飛ばす。

「どおおおりやああ!!!!」

ドオオオオオン!!

壁にぶつかった人型のガジェットはぶつかった衝撃で機能を停止し
た。

「はん、俺を倒したかったら後127年327日11時間23分4
3秒修行してから出直してきやがれ!!」

「何リアルになげー数字言っただよ!!そこは100年くらいで
いいだろーが!!」

ツッコムノーヴェ

「いいんだよそれくらいこまけーことは気にすんな」

「こまけーのはおめえだろーが!!」

「いいからとつとといくぞ管理局の奴らに見つかったらやb」そこ
までです!」あ……」

声がしたほうを見ると^{「コスプレ」}管理局員がいた。

栗色のツインテールで、格好は……やっぱり管理局はコスプレ集団だ!!何!?あの格好!?例えば俺が女でもあんな恥ずかしい格好しないよ!?あれか!?まだ自分が魔法少女だ、とか思ってる奴だろ!?あんな痛い子初めて見たよ!?

「コスプレ」

「え?」

「いや、どー考えたってその格好コスプレでしょね」ウエンディ」

「そーっすね。」

「いい年してコスプレなんて恥ずかしいね」

「ほんとっすよ。それに今時コスプレなんて流行らないっすよ」

ひそひそ話してるように見せかけて相手に聞こえるように話す

「うっ……」

コスプレ発言が効いたのか、声を漏らすコスプレ野郎

キラーン

「いまだ……全員……！全力疾走で逃げろおおおおおおおお
おおお……！！！」

「え！？」

トトトトトトトトトトトト

作戦成功……！

相手をコスプレ発言で弱らせ、その隙に逃げる……！

貴様がそんな格好してるから悪いのだよ（笑）

このままにげk

「待ちなさい！」

あ・・・

「時空管理局・機動六課ライトニング分隊隊長、フェイト・テストロツサ執務官です！ 貴方達が持つてるレリックをこちらに渡して、投降して下さい！」

目の前に金髪コスプレが現れた！！

オーマイガー

人生そんなにあまくなーい

そーですよねー 一人や二人なわけないもんねー

どーっすかなー

あ．．．

『アギト。ユニゾンっすっぞ。』

『あ！？ちょっと待てよ！おまえとのユニゾン適正わかんねーんだぞ！？』

『つべこべ言ってる暇はねえ！やるしかねーんだよ』

『ちっ．．．わかったよ！』

「よし、ユニゾンするぞ！アギト！」

「おう！」

ユニゾンすると聞いて警戒する金髪コスプレ

「「ユニゾン・イン」」

「え！？」

「ユニゾンって、おい適正の方は大丈夫．．．」

この世の中白黒はつきりしないのはいつものこと（後書き）

次回「金髪コスプレ、蠟人形にされる!？」お楽しみに

健「いやできねーからふつー!？」

フェイトはバルディッシュを盾代わりにし、健一（閣下化）のパンチを防御する

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ」

「くっっ！」

健一（閣下化）は連続パンチをお見舞いする

「おお！すごいっす。押してるっす」

「・・・・・・・・」

感心するウェンディと茫然としているノーヴェ

『技名：オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ
オラ

ものすごい速さで連続パンチを繰り出す

コマンド： ×

』

「なんかでたーーーー！！！！！」

すると健一はパンチをやめ、

「バーニングキック婆阿似胃愚気津区！！！」

を喰らわせた

「キャー!!」

蹴りを受けたフェイトは後ろに飛ばされた

『技名：婆阿似胃愚気津区バーニングキック』

脚に炎をまといながら蹴りを喰らわせる
たまにやけどを負わせる

コマンド：

*ただし、その時にしか出せない

』

「その時ってどの時だ——————!!——!!」

健一は追い打ちをかけフェイトのいる所に走る

しかし、

「バルディシュ——!!」

<Yes・sir>

フェイトはバルディシュを構えていて

「プラズマ・・・」

「婆阿似胃愚バーニング・・・」

両者が技を出す準備押し、

「スマッシュ——!!——!!」

「^{パンチ}羽安置！！」

ズドオオオオオオ！！！！

『技名：^{バーニングパンチ}婆阿似胃愚羽安置

手に炎をまといながらパンチをくらわす
たまに火傷を負わせる

コマンド：@

*ただしノ ヲエはツンデレ

』

「だれがツンデレだアアーーーー！！！！っていうか最後の技力
ンケーねーじゃん！！！！おまけに何！？あの「コマンド」？」

「ノーヴエはツンデレっすよ」

「うるせー！！」

閣下化した健一に異変が・・・

「ん？」

健一が光り出し、閣下化が解けてしまい元の姿に戻ってしまった。

「あ、やべ、閣下化とけちまった」

「言っちゃったよ！！閣下化っておもいつきり言っちゃったよ！！」

元の姿に戻った健一を見たフェイトはあることに気付いた

「！木刀を持っている・・・」

「あ？」

フェイトが驚くのも無理もない

何故なら健一の格好は着物を着ており、木刀を持っている。そして白髪。

木刀だけで犯罪者を倒した着物を着た男

フェイトはその時の男だと確信した

「何故あなたは犯罪者に協力しているんですか！！」

「はい？」

声を荒げるフェイトに健一は疑問の声を出す

「スカリエツティは犯罪者なんですよ！！多くの違法研究をしてきた広域指名手配されてる重犯罪者です！
そんな人物となぜあなたは協力しているんですか！！」

自分には関係ないと思っていることに限って関係あったりする（後書き）

次回「六課VSナンバーズ」お楽しみに

健「いや、全員でる訳じゃないけどね」

やるやる詐欺ってあるけどそんなのどうでもいっしょだと思っ(前書き)

嘘つきました

機動六課VSナンバーズ

今回はなしですまた今度・・・

やるやる詐欺ってあるけどそんなのどこでもいっしょだと思う

「スカリエッツィは犯罪者なんですよ！！多くの違法研究をしてきた広域指名手配されてる重犯罪者です！

そんな人物となぜあなたは協力しているんですか！！」

怒りを込めたかのような声を出すフェイト

『犯罪者』に協力しているという理由だけでは怒ってるとは思えない
くいと健一は思った。

まるでスカリエッツィが許せない、そう言いたそうな感じがする。

「いや、別にお「フェイト大丈夫か！」・・・あ」

なんかかんやしているうちに応援が来てしまいました。

「うん、大丈夫だよ士郎君」

士郎 そう、衛宮士郎である。

投影魔術を使う、スカリエッツィから言わせれば「バグ」だそうだが
なぜかって？どー考えたってありえねーだろ、剣とか造ることがで
きるんだぜ？

「・・・てめえ、よくもっ！」

そういつて士郎は投影魔術で双剣を投影し健一に襲いかかってきた。

健一はすぐさま対応し、木刀を取り出し剣を受け止める。

「おいおい、いきなり物騒だなおい。」

「うるさい！！おまえは 俺が倒す！！」

そう言つて士郎は今度は金ぴかの剣を投影し、襲いかかった。

しかし、健一は平然と回避する。

「ちっ！」

攻撃が当たらないことに苛立ちを隠せない士郎

ここで、防戦一方だった健一が動いた。右手に持った木刀を右から袈裟に振るい、そして返す刀で再び木刀を振るった。

士郎は予想していたよりも力のある剣だったため、思わず受け止めてしまう。

「くっ！」

ここで健一が隙をついて足を高く蹴り上げ、

ガキイイイン！！

金ぴかの剣を蹴り飛ばした。

「ぐあっ」

一瞬あつけにとられてしまった士郎は、健一が振り下ろした木刀をくらってしまった。

「士郎！」

応援に駆け付けてきた神谷霧雨が士郎の名前を叫ぶ。

「よくも士郎を・・・！！」

そういつて銃剣型のデバイス『サンダ ソール』を取り出し、魔力弾を発射し、攻撃する。ちなみに名前からして雷の変換形質が使えますこの厨二病。

「おっと」

しかし健一は、木刀で魔力弾を難無く弾く。

神谷はそのまま突進し健一に向け銃剣を振りかぶった。健一は木刀でその攻撃を受け流し、左手で顔面パンチをくらわした。

「ぐっ」

パンチを食らった神谷はそのまま後ろへ飛ばされてしまった。

「この野郎！」

攻撃をくらってダウンしていた士郎が復活し、双剣を再び投影し襲いかかった。

「くっ！」

木刀と双剣がぶつかり合う。

「・・・おい！その金髪！」

「え？」

自分のことをさされたのか一瞬驚いてしまったフェイト

「てめえらが犯罪者だが違法だが何言おうが、んなこと知ったこつちやねえ！！」

「え!？」

そう言いながら士郎を押し始める健一

「管理局が滅ぼうが国が滅ぼうが俺には関係ないもんね!！」

健一は木刀を振るいながらそう叫ぶ。

「俺は自分の体が滅ぶまで」

木刀を下から上に振り上げ士郎の双剣に打撃を与え腕をよろめかせる。

「うわっ!」

「背筋のばして生きていだけよおおおおお!!!!!」

木刀を横に振るいそのままフェイトのいる所に飛ばす。

「キャッ!」

悲鳴を上げそのまま土郎の下敷きになってしまった。

「よつと」

木刀をしまいその場に立つ健一

「すごいっす！Sランクオーバーの魔導師を魔法も使わず倒すなんて・・・！」

「あいつあんなにつえーのか・・・」

ウェンディとアギトが健一の強さに感心する。

が・・・

「やべ、トイレいきたくなっちゃった」

「「「はあああー！！！！！！」」」

ここでもさかのトイレ発言

かっこよく締めたのに最後の最後でグダグダに

「やばい、ガチションベンしなくなっちゃったていうか漏れる」

「ションベンとかふつーに言っな！」

顔を赤くして怒鳴るノーヴェ

「と、とりあえず急いで帰るっす!!」

そっいつてスタコラとその場を去る

「・・・あのほんとに何者なの・・・・・・？」

フェイトは突っ込むが答えてくれない人は誰もいません

やるやる詐欺ってあるけどそんなのどうでもいっしょだと思う（後書き）

次回は日常をかこつかな

転生者の誰かが死ぬ！？

こっついうのもありだよー

あーあたりー二日酔いだ 根畜生（前書き）

更新遅くなりました。

おまけに短い・・・

あーあたりー二日酔いだ 根畜生

健一達がレリックを回収して翌日、
目を覚ました健一は朝食を作る為、台所に行く。

「さてと、今日は何を作るかな」と

そついつて冷蔵庫を開け中にある材料を確認する。

「花 ピー 僕 ピー 騒ぐ〜」

DOESの曲修羅を歌いながら朝食を作る健一

「くく〜」

黙々と朝食を作る

「ふあ〜」

「お、起きたかヴィヴィオ」

「あ、健一お兄さん」

最初に起きたのはヴィヴィオ。

ちなみにヴィヴィオはナンバーズとも仲良くしている。

・・・最初の時は大変だったな急に泣き出すもんだからあやすのが大変だったな。

あれは今でもいい（？）思い出だ。

・・・ノ ヴエの紹介の時、

「あの赤毛の人は？」

「あれはツンデレだ」

「誰がツンデレだアアー！！！」

「ぶふおあ」

とやったのが面白かったな。殴られたのは痛かったけど・・・

「何してるの？」

「朝食作ってるんだよ。出来るまでに時間があるから顔洗ってきた」

「うん！」

ヴィヴィオは頷き洗面所に行く

さて、づづきをしますか・・・

朝食が出来る頃には全員起きており、食堂にも全員そろっている。

「にしても健一の料理ってふしぎだよねー」

セインがそういったのを健一が反応する

「あ？どこが」

「だって最初食べた時はみんな『意外においしい』っていうじゃん。でも二回目は『おいしい』だけなんだよ。ヴィヴィオも最初食べた時は『意外においしい』って言ったけど二回目は『おいしい』だけなんだよ」

「んーだこらア、俺の料理は何が意外なんだよ。」

「分かんない」

「分かんないってなんだよ！！言いだしつぺはオメ だろーが！」

「まあまあ落ち着いて」

いい争いする二人をなだめるウエンディ

「まあいい、ミートボールでも食べるか・・・」

そついつてミートボールに箸をのばす健一

しかし、前から出てきた箸が健一の箸に当たった。
健一は箸の持ち主を見たら、ノ　ヴェだった。

「おい、箸どけろや」

「おまえがどけろよ」

互いに睨み合う健一とノ　ヴェ

「このミートボールは俺が先に目つけたんだ！大人しく引っ込んで
ろ」

「あたしのほうが、てめえより先に目つけた！」

互いに譲ろうとせず、箸を引かない。

「ミートボールは俺（私）のだあアア！！」

と、箸を使って戦い始めました（笑）

「ノ　ヴェ姉さん！健一お兄さん！」

「「あゝん！？」「」

額に青筋を浮かべながら二人が同時に声をしたほうを見れば

「・・・ふえ（泣）」

いまにも泣きそうなヴィヴィオがいました。

「け、喧嘩はしないで・・・（泣）」

目をウルウルさせながら言う。

あ・・・やべえこれはどーにかしねーと

「べ、別に喧嘩してねーよ、な！」

「お、おおこれはその・・・ちょっとテンションが上がっただけだよな！？」

「そうそう！」

肩を組み合い笑う二人

それを見て安心したのか笑顔になったヴィヴィオ

どんな大人でも子供には勝てません（笑）

なんかかんやで朝食が終わり、健一は研究室に来ていた。
スカリエッティに呼ばれたからだ。

「呼び出してすまなかったね」

「べつにかまわねーよ、それより黒いガジェットについてだろ」

「よくわかったね。そのとおりあのガジェットだが私のガジェットよりAMFの量が多いことが分かったよ」

「つまり、魔法は聞きにくいと」

AMFは魔導師にとってはやっかいな代物である。スカリエッティのガジェットでも厄介なのだがそれよりも多いとなると面倒だ。・
・健一から言わせれば魔法を使わなければいい話なのだが

「恐らく作ったのは……」

「デア・オリス」

健一の言葉にうなずくスカリエッティ

「全く、面倒な野郎だぜ」

そうつぶやく健一

「奴らもレリックを狙ってるだろうな」

ヴェンテットの狙い

レリック

何の目的かは分からない。しかし何か動き出してるということとは確か。

動き出す闇

そしてその結末とは

あーあたりー二日酔いだ 根畜生（後書き）

最近ちょっと厳しんで更新遅くなります。

待っていただけると嬉しいです。

雑談ですがForceの二次小説って少ないですよね。

・・・いつそ俺がやるか（笑）

鍋は人生の縮図である（前書き）

更新が最近ムズくなってきた。

S T S の展開より F o r c e の展開が頭の中をめぐっている（笑）

そんなこんなでどうぞ

ちなみにこの話はヴィヴィオが来る前の話です。

鍋は人生の縮図である

ここはスカリエッツィのアジトin食堂である。

そこにあるのは鍋

健一が鍋を食べようと思ったので奮発し最高級の黒毛和牛と結構高い野菜でとれたて新鮮の物を買ってきたのだ。しかし健一は焼き焼きを作っただけならふく食ベるといふ腹黒いことを考えていたが、ナンバースもそのことに気づき、結局全員で肉争奪戦になったのである。

そしてその周りを囲むトレ、チンク、セイン、ウエンディ、ノヴェ、ディエチ、健一、スカリエッツィがいる。

ウノとクアットロは用事がある為席をはずしている。

「ほう、これが鍋料理というものか。なかなかおいしそうじゃないか」

嬉しそうに語るチンク

「確かに、いい匂いがするな」

ノヴェも同じように言う

「おいしそうっすー！」

「いい匂い・・・」

「今日はもうめんどくさいことは忘れてジャンジャン食べようよ」
「・・・そうだな」

各自が色々言うが、全員心の内では腹黒いことを考えている。

不意にセインがテレビのほうを見た。

「あ、カトケンまた出てるよ。去年で消えると思ったけどHGにキ
ヤラ変えて人気出たんだね」

「でもあれだな、最早歌手にとって歌がステータスじゃなくなつて
るよねそれ！」

チャンスと思い鍋に箸をのばすノ ヴェ

（とつた！）

しかし、鍋は一瞬にしてご飯に変わっていた。

（な！）

「アレ、これ火弱くなってるね」

「そうっすね」

なんと健一とウェンディが鍋とご飯を入れ替えていたのだ。

（鍋將軍は・・・）

（あたしたちっす！）

ブシュ

セインが鍋に向かってくしゃみをし、箸も吹っ飛んだ。

「あ、ごめんあたし風邪ひいたかもしれない」

()()()(な、なにいいいいいい) () () ()

(手も箸も使わずにくしゃみで・・・第一手を決めただと？)

(こんな先手の決め方があったとオオオオオオオ！)

何事もなかったかのように鍋を突っついてるセイン

(いや・・・事実、こんな鍋はもう食べる気がしないもうこの鍋はセインしか食べれなくなっす)

(無邪気・・・無垢なる心が導いた勝利だとも・・・)

(いや・・・この女)

(ククク・・・鍋將軍はあたしだよ)

(この女・・・無垢なんかじゃない！)

しかしよく見るとト レの皿には一人分の野菜と肉がある。

(な！？ト レいつの間に！)

スカリエツティがト レを驚いた眼で見ている。

実はト レ、IS『ライドインパルス』を使い目にも止まらない速

さで肉と野菜をとっていたのだ。

（ククク・・・貴様らの愚かさには呆れてしまうな）

憎たらしい笑みを浮かべ勝ちほっこった顔をするト レ

（何イイイイイイイ！）

（ト レのキヤラ崩壊だと！）

健一とノ ヴェは絶叫して驚く。

（気づくのが遅すぎだ。貴様らが争っているうちに私は気づかれなように、すき焼きから少しずつ取っていた）

（ククク哀れにもほどがあるな坊やたち・・・テレビに夢中になっていたのは私の芝居・・・ケツの青い坊やたちを油断させ鍋將軍になるための布石だったということに・・・そこで指をくわえて見ているが良い。貴様らの愛する牛肉が、私達に蹂躪されるザマを）

そしてセインはすき焼き鍋を両手で持ち、ト レはすき焼き一人前が入った皿を持ち、笑みを浮かべる。

「がぁぁあ！！」

そしてセインは一気に飲み乾す。

（ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ！？）

（セインもキヤラ崩壊だと！？）

ノ ヴェとチンクは心の中で叫ぶ。

（こいつってこんなキャラだったっけ！？）

（それにト レもわざと肉を一气飲みしようとしている！）

とそこに、用事が終わったウ ノとクアットロがきた。

「遅れましたドクター」

「用事が終わったので戻ってきました」

（ふん、今更きたのか）

（既に黒毛和牛は私たちが頂いた・・・）

「って、なによこれゝ安い豚肉じゃないゝ」

「なんで黒毛和牛じゃなくて豚肉何ですか」

衝撃の言葉に驚くト レとセイン。

（な、何イイイイ！？）

（豚肉だと！？）

衝撃の展開に驚くチンクとノ ヴェとデイエチとウエンディ。

しかし、健一とスカリエッティは平然としている。

（まさか！？）

二人の様子を見て理由が分かったト レとセイン。

（その通りお前らが牛肉だと思って食べた肉はすべて・・・安い

豚肉だ！！）

（ククククク．．．私に計算プレイで勝とうなどと100年はや
い。クククク．．．アッハッハッハッハッハッハッハッハ
！！）

その時ト レとセインは氷づくかのように驚いた。

（そ．．．そんな今まで信じていたものがウソだったなんて．．．）
（私の生活は全て虚構で固められたフィクションであり実際の人物、
団体は一切関係ありませんなんて．．．）

（ 私はその時自分の足元が崩れさるような言い知れぬ不
安を感じていた）

（もう誰も信じない。信じられない。豚があいつであいつが豚でキ
ヤッホウオオ！ テメ ラ全員ノ小指ヲ骨折シロ．．．）

そしてト レとセインは気絶した。

（二人消えたか．．．）

数分後、黒和毛牛と新鮮な高級な野菜のすき焼きが完成した。

「おいしそうね」

「そうですね、ウ ノ姉さま」

嬉しそうに言うウ ノとクアットロ
しかし勝負はここから

（人数が減った。これでいける！）

そう健一は意気込む

（無限の欲望の名はだてじゃない。鍋將軍の座は私の物だ）

（そうはいかないっす。鍋將軍は私の物っす）

（私だって譲れねえ）

（私を忘れてもらっては困る。）

（私だって・・・）

全員戦闘態勢に入り・・・

（このすき焼き戦争を制するのは・・・）

（俺（私）だあああああああ！！！！）

ドガアアアアアアアアアア！

「どあああああ！」

「キヤアアアアアアア！」

「ぐああああ！」

突如、爆発的な衝撃を受けて飛ばされる健一達。
その影響でディエチとスカリエッティは壁にぶつかり気絶してしま
う。

「ば、馬鹿な！何が起こった！」

「私たち以外でこんな・・・」

「あ・・・あれを見るっす」

「あ・・・あれは」

健一達は目の前で起こっている光景に驚く。それはウ　ノとクアッ
トロが眼を光らせてすき焼きを食べている光景であった。

健一とウエンディが鍋に箸を伸ばそうとしてもウ　ノは肘で顔面を
殴り飛ばす。

ノ　ヴェとチンクも箸を伸ばすがクアットロの蹴られ飛ばされる。

（に・・・肉所が・・・）

（鍋にも・・・）

（届かないっす！）

（こ・・・こんなことが）

圧倒的な力で返り討ちにされた。

「やあああああああああ！」

目にも止まらない速さで何度も鍋に箸を刺すかのように肉を取って食べるウ　ノとクアットロ。その姿は鍋將軍どころではない・・・言うなら『皇帝鍋レオン』である。

（桁が違う！鍋が遠い！届かないっす！）

（この２人、外見とは裏腹になんていう欲張り！？）

（いやでも片方はありえるかも・・・）

（所詮井の中の蛙、互いに傷つけあったあの悲しい戦いに何の意味もなかったとも言うのか・・・）

健一達が諦めかけたその時、

（いや・・・違う）

健一とウェンディはウ　ノの箸をつかみ、チンクとノ　ヴェはクアットロの箸をつかんだ。

「だからこそ！」

「あの戦いを無駄にしねえためにも！」

「これだつたら豚肉のほうがいい」

と、ウ ノとクアットロのすき焼きを不評する

それを聞いた健一、ウ ノ、クアットロ、チンク、ノ ヴェ、ウエ
ンディは……

「てめえエエエエエエエエエエらアアアアアアアアアア！」

「なめてるのオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

「不味いつてどオ言うことよオオオオオオ！！！！」

「聞き捨てられないぞオオオ！！！！」

「出せエエエ！！！！」

「今すぐ出せエエエもんじゃでもいいから出せえやああああ！！！！」

などと暴れまくる健一達

その光景を見ていたルーテシアとアギトは

「人の争い事って虚しいね・・・」

「ああ・・・」

哀れみの視線で見ている。

鍋は人生の縮図である（後書き）

こんなかんじで（笑）

P S : 週間ユニークアクセスがやばいことに・・・（汗）

綿棒で耳かくとき気持ちいいよね（前書き）

更新遅れました。

おまけにグタグタ・・・

次回から物語が動き出します。

綿棒で耳かくとき気持ちいいよね

「なんか増えてね？」

「どーも健一です。」

え？いきなりなにかって？いや、朝起きてナンバーズと集まってみたら3人増えてんだよ。

「初めまして、NO・7のセットです」

ピンク色の髪をしたセットが最初に自己紹介した。

「NO・8のオットーです」

次に茶色い短い髪をしたオットーが言った。

「おはようございます、健一兄様。NO・12のディードです。」

頭にカチューシャをつけた、茶色いロングヘアのディードが挨拶をする。

「どーも山本健一です」

三人が自己紹介したので自分も自己紹介する。

「っていつかディード？なんで兄様？俺達別に兄妹じゃなくね？」

「私にとっては、兄のような存在です」

「マジで？俺みたいなのマダオ（まるで駄目なおっさん略してマダオ）

が兄でいいの？」

健一は前世でも兄弟がいなかったので新鮮な気持ちに浸る。

「健一兄さん！おはよう」

と、下の方から声がしたので見てみるとこちらを見ているヴィヴィオがいた。

「おーヴィヴィオ。おはよう」

頭を撫でてやるとえへへと、笑う。

「ほら、ぼさつとしてないで訓練するぞ！」

「はいはいわかりましたよ」

今日こそは絶対とたおしてえやらあ。やるもんならやってみるやゴラア。

・・・などくだらないやり取りをしながら訓練室に行く健一達。

ちなみに何故訓練するかというと明日地上本部を襲撃するとかんやら、だそうだ。

ノ
ヴェ
の場合

「どうおおおりりややややー!!」

「くっ!」

ただいまノ
ヴェと模倣戦中。

ちなみに木刀は使ってねーよ、素手で戦ってる。

「どーした！そんなもんかこのツンデレ」

「誰がツンデレだアアアーーーー！」

「おめえのことだアアアアー！」

半分ふざけながらやってます（笑）

ただ、ふざけすぎて遊んでいると

「真面目にやらんか!!」

ト
レに拳骨くらった。

セインの場合

「セイン！もつとISを使った攻撃をしろ！」

「分かってるよ」

そんなくらい？

「ちよつ！みじか！」

作者の都合です

セツテの場合

「セツテは武器を上手く使って戦え」

「はい」

セツテにブーメランの上手（？）な使い方を教えたりする。

「そーそ、そんな感じ……ぶべら！」

「健一！」

よそ見をして後ろから飛んできたブーメランにぶつかったのはまた別のお話（笑）

トレの場合

「おめーとはやらねーぞ」

「何故だ？」

疑問の声を上げるトレ

「だっておめーもうすでに目えキラキラ輝いてるぞ！ぜってー」さあ始めるぞ」って人の話聞けや！」

強制イベント発生

V S トレ（笑）

ウェンディの場合

「ウェンディはあれだ・・・幻覚を見破れるよになつとけ」

「了解っす」

「つーわけでこれ訓練内容」

そっいつてウェンディに訓練内容を見せる

「どれどれ・・・ムリっす！！ハードすぎるっす」

「うるせーな、俺だって大変なんだぞ？戦闘^{トレ}狂の相手とか戦闘^{トレ}狂の相手とか・・・」

「全部ト レ姉じゃないっすか・・・」

つつこむウエンディ。

ディ ドの場合

「とにかく斬れ！斬って斬りまくれ！そーすりゃたいていどーになる！」

「はい健一兄様！」

ディ ドは二つの剣を振るいながら健一と戦う。

なに？剣術おしねえのかって？・・・俺の我流だし・・・ねえ？

チンクの場合

「まず武装だけどスティングーに金属製の糸をつけてだな・・・」

「まで。それだと某作者とかぶるのでは？」

「だいじょーぶだよ。スティングーに細工をしてだな・・・」

「どんな細工だ？」

「スティングーの柄の部分を押すと・・・」

「押すと？」

「醤油が出る」

グサッ

オットーの場合

「テルズの魔法（？）みたいなやつを教えるかー、あ待てよ。どーすればいいんだ？ま、適当にすればいいか」
「はぁ・・・」

健一の言葉に頷くしかないオットー
テルズって言われても分かんないもんね

「あーあ疲れた」
溜め息をつく健一・・・ほとんどレのせいだが

「ふざけてたやつが言うセリフかそれ」
「うるせーなツンデレ」
「誰がツンデレだ！」

反論するノ ヴェ。ぶっちゃけこの光景見飽きた。

「にしても健一兄様は強いですね」
「んーまーな鍛えてたからな」

鍛えただけで戦闘機人に勝てるのはおかしいと思ったチンク達は悪くないと思う。

半分真面目、半分おふざけの訓練が終わりそれぞれ解散した健一達

自分の部屋に帰る途中に、金髪の見慣れない女性がいた。
女性は俺に気付いたのかこちらに近づいてきた。

「お久しぶりです。健一さん」

「もしかしてその声……ドウ エか？」

あれ？最初会ったときと姿違くない？

「人斬り調査以来ですね」

「そうだな」

ドウ エの言葉に頷く健一

……そういえば最近人斬りの話が出てこねーな。やな予感が
するけど

「ところで任務中じゃなかったっけ？」

「ええ、任務中ですよ今日は報告をしに来たんです」

なるほどそれで戻ったわけか。

「まあこんな所で立ち話もなんだし、スカリエッティの所に行くか」

「ええ」

そういつて健一は研究室に案内する

……

「やあ、よく帰って来たね」

スカリエッティは笑顔でドゥーエを出迎えた。

「みんなあなたに会いたがってたわよ」

ウーノも笑顔で迎える。

「久しぶりですからね」

実は人斬り調査の時に何度かアジトに戻ってきていたのだ。

「あ！ドゥーエ姉帰ってたんだ」

セイン、ウェンディ、ディエチ、ノーヴェ、チンクが部屋に入ってくる。

「任務は大丈夫なのか？」

「問題ないわよ、順調に進んでいるわ」

チンクの問いにドゥーエが答える。

「戻っていたかドゥーエ」

さらに部屋にトーレ、クアットロ、セツテ、オットー、デイドが入ってきた。

「久しぶりね」

妹達にあえて嬉しいのか笑顔になるドゥーエ

「そうだ！折角ドウ　エ姉が帰ってきたからみんなで夕食食べよう！」

「夕食ですか…」

「そうだ、せっかく戻ってきたんだから食べていくといい、時間はあるだろう？」

「そうですね…顔を出して帰ると思ってましたが、せっかくですから」

スカリエッティの誘いにドゥーエは承諾する。

まあ料理作るのは俺なんだがな。と心の中で呟く健一。

「と、いうわけで、よろしく頼むよ健一」

「料理すんの俺なんだぞ？ていつか作る方の苦勞も知れやゴラア」

文句をぶちまける健一

「ヴィヴィオも手伝う！」

ヴィヴィオ・・・おめーの優しさに涙が出そーだわ

「サンキュ、じゃ作るとしますか」

〈省略〉

夕食が終ってドウ エを見送った後、健一は一人酒を飲んでいた。

「お前はよく酒を飲むな」

近づいてきた男がそう言う。

「よお、おっさん」

この男はゼスト、なんでも馬鹿スカリエッティよって蘇られた人造・・・何ちゃらだそうだ。

「おっさんはよせ。．．．というか精神年齢はお前の方が上ではないのか？」

そうそう、俺に前世の記憶があることにはナンバーズやおっさん達にも教えてる。

．．．反応がおもしろかったことだけは覚えている。

「いいんだよ。精神年齢は40でも心は少年だから」

「矛盾してるぞ．．．．」

精神と心は違うぞ？多分。

「明日はいよいよ地上本部の奇襲だな．．」

「ああ．．．」

健一の言葉に頷くゼスト

しかし、あの男が動き出していることに誰も気づいていない。

憎しみを背負い復讐をせんとする男が

綿棒で耳かくとき気持ちいいよね（後書き）

次回からやつと戦闘シーン・・・迫力ある風に見えるかな・・・

番外編？ 宗教団体の勧誘が来たら断ろう（前書き）

番外へん

．．．．．といってもなのは側の方の話をするだけなんだけど

番外編？ 宗教団体の勧誘が来たら断ろう

これは地上本部が襲撃される前の話・・・

聖王教会。

なのは達はある一室の扉の前に止まり二回ほどノックをした

「失礼します。」

「どうぞ。」

中からの返事を聞き掠たちはドアを開け中に入る。

「高町なのは一等空尉です。」

「フェイト・テストロッサ執務官です。」

「神谷霧雨二等空佐です。」

「八神信也一等空位です。」

「衛宮士郎執務官です。」

それぞれ敬礼しながら名前と階級を答えていった。はやてだけはそれを見てニコニコしていた。

「はじめまして。聖王教会教会騎士団騎士カリム・グラシアと申します。どうぞ、こちらへ。」

席に座ることを促され六人は用意されていた椅子に座った。そして、席にはもうすでにクロノが座っていた。

「お久しぶりです。クロノ提督。」

「ああ、フェイト執務官。」

「お二人とも、そう硬くならないで。私達は個人的にも友人だから、いつも通りで平気ですよ。」

カリムは二人のやり取りをみてクスリと笑う。

「と、騎士カリムが仰せだ。普段と同じで。」

「平気や。」

クロノは先ほどの固い表情から柔和な表情に変化した。そしてなのはたちも普段通りの態度にした。

「じゃあ、久しぶりクロノ君。」

「元気にしてた？」

「ああ。」

なのは達はそれぞれ挨拶交わして、はやてが話をし出した。

「・・・さて、昨日の動きについてのまとめと、改めて、機動六課設立の裏表について、それから、今後についてや。」

部屋のカーテンが閉められ一気に室内が暗くなった。はじめにクロノが口を開いた。

「六課設立の表向きの理由は、ロストロギア『レリック』の対策と、独立性の高い少数部隊の実験例。」

何もない空間にモニターが展開され画像が映し出される。そこにはカリム、クロノ、それと彼の母親であるリンディが映っていた。

「知つての通り、六課の後見人は僕と騎士カリム、それと僕の母親で上官のリンディ・ハラオウンだ。」

画面が切り替わり別の画像が映し出される。

「それに加えて非公式ではあるが、かの三提督も設立を認め、協力を約束してくれている。」

なのはとフェイトはこの事実に驚く。彼らは「伝説の三提督」と呼ばれ管理局では知らないものはいないほど有名だ。そんな彼らが協力しているとは思わなかったのだろう。

「僕達が出向したのも三提督のお達しでね。この話があつたときに

騎士カリムと出会ったんだ。」

「でもどうして三提督が強力を？」

「その理由は私が説明します。」

カリムは立ち上がりテーブルから離れる。彼女の手には紐で括られた紙の束が握られていた。カリムは紐を解いていく。すると紙が光だした。

「私の能力、預言者の著書」

光りだした紙はカリムの周りを囲うように浮かび上がった。

「これは最短で半年、最長で数年先の未来、それを詩文形式で書き出した預言書の作成を行うことができます。二つの月の魔力がうまく揃わないと発動できませんから、ページの作成は年に一度しかできません。」

すると一枚の紙がなのはたちのテーブルの上に飛んでくる。

「預言の中身も古代ベルカ語で、しかも解釈によって意味が変わることもある難解な文章。」

世界に起こる事件をランダムに書き出すだけで、解釈ミスも含めれば的中率や実用性は割とよく当たる占い程度、つまりは、あまり便利な能力ではないんですが。」

紙はカリムの元に戻り元の配置についた。

「聖王教会は勿論、次元航行部隊のトップもこの予言には目を通す。」

信用するかどうかは別にして、有識者による予想情報の一つとしてな。」

「ちなみに地上部隊はこの予言がお嫌いや。実質のトップがこの手のレアスキルとかお嫌いやしな。」

はやてはため息をつきながら言った。そう地上部隊のトップはレジアス・ゲイズ中将だ。中将は魔力を持たないため魔法以外の犯罪対策などを多く考案している。その所為か有能な魔導師を好ましく思っていない。

「そんな騎士カリムの予言能力に数年前から少しずつ、ある事件が書き出されている。」

黒き獣、人を殺めし者と歪みし者どもを率いて現る

旧き結晶を用いて世界を破滅へと導かんとする

中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ち

それを先駆けに数多の海を守る法の船は砕け落ちる

その予言を聞いたときその場にいる全員の顔が強張った。

「それって……」

「まさか……」

「世界を滅ぼすうとする何者かが現れ、地上本部が壊滅し管理局の

システムまでもが崩壊してしまうことを示しています」

カリムの言葉を聞いて全員が息を呑んだ。管理局の崩壊など今までに考えもしなかったことだ。にわかに信じられない話だろう。

「その预言つてどこかの組織が管理局を潰しに来るってこと？」

「ありえるかもしれない特にS級犯罪組織『ヴェンテット』、奴らが動くならあり得るかもしれない」

信也の言葉を肯定する衛宮。

「それに『黒き獣』と『人を殺めし者』、『歪みし者ども』た何のことだろう・・・」

「『人を殺めし者』は恐らく人斬りのことを指しているかと思われます。しかし他の二つはまだ何のことかは・・・」

预言の内容に疑問を持ったフェイトに答えるカリム

「人斬り・・・」

人斬りの言葉を聞いて顔を曇らせるのは

「一応、本局の方でも警備を強化してはいるんだが・・・」

「問題は地上部隊なんです。」

「レジアス・ゲイズ中将か。」

神谷は問題の根源を口にする。レジアス・ゲイズ中将は有能な魔導師が嫌いだ。カリムの予言も信じていないらしい。

「協力の申請はしているがいい返事は期待できないだろう。こちらが無理を言って内政干渉や強制介入などと言われたくないからな。」

「表立つての主力投入はできない、と？」

「・・・そうだ。すまないな。あまり現場に政治的な話は持ち込みたくないんだが。」

クロノは申し訳なさそうに言う。

「裏技気味でも、地上で自由に動ける部隊が必要やった。レリック事件だけでコトが済めば良し、大きな事態に繋がっていく様やったら最前線で事態の推移を見守って・・・」

「地上本部が本腰を入れ始めるか、本局と教会の主力投入まで、前線で頑張ると？」

「それが六課の意義や。」

はやては真剣な表情で語った。なのは達はその表情を読み取りことの重大さを理解したようだ。

「とりあえず、いつもどおりお仕事をしていればいいってことでしょ。」

「いや、そやけど。なんか軽いな。」

「まあ、でも力入れすぎるよりはいいんじゃないか。」

「そうやな。」

「えっと、お話中のところ悪いですけど、まだ続きがあるんです。」

「ええ!？」

和んでいたところでカリムが驚愕の事実を伝えた。

「それでどんな内容なんです?」

カリムは続きの予言を読み始めた

白き夜叉、己が護るべきものの為に剣を取り

人を殺めし者と対峙する

そして世界は破滅への運命を免れる

カリムが読みをえると、室内には重々しい空気が残った。

「つまり・・・世界は滅ばないって事?」

「恐らくそう思われます」

なのはの問いにそう答えるカリム。

その言葉に全員が安堵した。

「にしても……『白き夜叉』ってなんだ？」

「それが何も……」

衛宮の問いに首を横に振るカリム

「……とにかく今の俺達が出来るとは世界を守ることだな」

「そうだね……」

こうしてなのは達はその場を解散することになった。

番外編？ 宗教団体の勧誘が来たら断ろう（後書き）

次回こそは戦闘シーンを・・・

善人と悪人の違いは誰にも分からない（前書き）

SとSが終わったなら銀魂ネタやろうと思ってます。リインフォース
がバクに感染して
リインク工編とか（笑）

善人と悪人の違いは誰にも分からない

もうすぐ日が沈みそうな時間帯に地上本部を眺めている二人の人影がある。

「連中の尻馬に乗るのはどうも気が進まねえけど」

「それでも貴重な機会ではある。今日ここで、全てが片付くならそれに越したことはない」

「まあね」

話をしている一つの人影は、以前健一と一緒に行動していたアギトという赤髪の融合騎。

もう一つの影は、アギトと行動を共にしている寡黙そうな大柄な男、ゼストである。

ゼストはモニターを見つめながらアギトと話をしている。

「旦那の目的はこのヒゲオヤジだろ。そこまではあたしが付いていく、旦那のこと護ってあげるよ。」

ゼストはモニターを消し、口を開く。

「・・・おまえの自由だ。好きにしろ」

「するともさ！旦那は私の恩人だからな」
胸を張ってそう言うアギト。

「スカリエッティ、こっちの準備はOKだ」

「ゼスト殿も所定の位置に着かれた」

「攻撃準備も全て万全。後はゴーサインを待つだけです」

現場にいる健一とトレ、クアットロが、アジトにいるウノとスカリエッティに報告した。

ちなみに健一はオットーとディードと行動している。

しかし、健一だけ何か考え込んでいるような表情をしている。その表情を不思議に思ったのかウノが質問した。

「どうかしたのかしら？健一。何か考えているようだけど？」

「いや……なぐんか忘れていたような気がしてだな……」

うーん、といった表情をする健一にクアットロが口を開いた。

「何を忘れちゃったのかしら〜健ちゃん〜。あ、もしかして外もパ
ーだから中也パーになっちゃったのかしら?」

「だれが頭パーだゴラア!!この腹黒メガネが!メガネがち割つぞ
ゴラア!あん!?!」

「やめんか貴様ら!!作戦前だぞ!」

健一とクアットロを怒鳴るトレ。

ちなみに何故、健一が怒っているかというとな健一の髪型が天然パ
マだからだ。本人このことすっごい気にしている。

その様子を見て必死に笑いを堪えているスカリエッティ。

「あつ!!てめっ!何笑ってんだゴラア!!」

「落ち着きたまえ健一。誰にだって・・・くつくつく・・・コン
プレックス位・・・くつくつく・・・あるさ。気にすること・・・
くつくつく・・・ないさ」

「てめえ帰ったら一発殴るから覚悟しとけよ」

低く、鈍い声でそう言いながら指をポキポキ鳴らす健一。

「遠慮しておこう」

さすがに身の危険を感じたのか顔が青ざめるスカリエッティ。

これから襲撃をする連中とは思えない位なんともグダグダ。

ウノは咳ばらいをして、その場をおさめた。

「・・・ドクター」

「ああ、分かっているとも」

スカリエッティは、椅子から立ち上がる。

「我々のスポンサー氏に、とくと見せてやろう。我等の想いと、研究と開発の成果をな。」

「さあ！ 始めよう！！」

「はい」

スカリエッティの合図と共に作戦が開始され、いよいよ地上本部襲撃が始まった。

「ミッションスタート！」

合図を受けて、クアットロの周囲にパネルとモニターが現れた。

地上本部付近の空中に佇むクアットロは、IS『シルバーカーテン』発動させて地上本部のシステムに侵入。指揮通信系統をダウンさせ、建物の基幹システムを活動不能に追い込む。

。

「IS発動『ランブルデトネイター』」

その直後、地上本部の地下に潜入していたチンクが、スティングアーを放ち、ISを発動させて爆発を起こして内部施設を破壊した。

別の建物の屋上に待機していたディエチは、長い砲身を持つ重狙撃砲である固有武装『イノームスカノン』を地上本部に向けて構えていた。

「IS発動。『ヘヴィバレル』」

ISで自身のエネルギーをイノームスカノンのエネルギー弾に変換させ、地上本部に照準を合わせる。

「バレットイメージ・エアゾルシエル。発射」

イノームスカノンから、エネルギー弾が発射された。

放たれたエネルギー弾は、見事地上本部に命中し、爆発と共に建物の中にガスを拡散させる。中にいる局員はガスを吸って麻痺し、次々と無力化して倒れていく。

すると、外にいる沢山の武装局員が地上本部に向かってくるの空中で佇むトーレとセツテが見据えていた。

「セツテ。お前は初戦闘だが」

「心配ご無用。伊達に遅く生まれてません」

セツテは眼前の敵を見据えて、手にしてるブーメランブレードを構えた。

「IS発動。『スローターアームズ』！」

「『ライドインパルス』！」

トーレもISを発動させて、戦闘態勢に入る。

「アクションー!!」

二人は同時に動いて、武装局員の群れの中に飛び込んでいった。直後、半数近くの武装局員が落ちた。

地上本部の地下通路。

通路を走る四人の人影があつた。

機動六課のスバル、ティアナ、エリオ、キャロ。

地上本部の中で警備をしている、なのは達にデバイスを届ける為に地下道を走っている。地上本部の中にデバイスの持込は禁止になつていて、なのは達は自分達のデバイスをスバル達に預けたのだ。（ちなみに他の転生者達も同じく）

「マツハキヤリバー！」

プロテクション
『protection』

何かに気付いて、スバルはプロテクションを張った。

直後、プロテクションに弾丸のような物が当たった。敵からの攻撃と判断した四人は、すぐにデバイスを構える。

その時、スバルの前にノーヴェが現れた。ノーヴェの姿を見て、スバルは驚く。

驚いているスバルに、ノーヴェは蹴りを放つ。

スバルは咄嗟に腕を交差させて防御体勢をとるが、ガードの上から吹き飛ばされて壁に叩きつけられる。

「スバル！」

ティアナが振り返って叫ぶ。

同時に、自分達を囲む大量の濃いピンク色のスフィアが目に入った。

「ノーヴェ。ちょっとやりすぎじゃない？」

ライディングボードを持ったウエンディが姿を現す。

「うるせーよ。」

ぶっきらぼうにノーヴェが答える。

「旧式とはいえ、『タイプ・ゼロ』がこれくらいで潰れるかよ」

ノーヴェの蹴りを受けたスバルが、複雑そうな顔で立ち上がった。

「戦闘………機人………」

ノーヴェとウエンディを見て、ティアナ達は表情を険しくさせる。

一方、オットーとデイド、そして健一が未確認のレリックを回収するため機動六課に向かっていた。

「・・・ん？」

すると健一が一人の人影がどこかに向かうのを見た。
何か嫌な予感がする、そう思った健一はその人影についていくことにした。

「健一兄様！？」

「デイド、オットー、先にお前ら行ってる。おれは用事を済ませてから行く！」

そう言つて健一は方向を変え人影の後をついていくことにした。

地上本部付近では、ヴィータとゼストが激しい空中戦を繰り広げていた。両者ともユニゾンをして、能力を向上させて戦っている。
振り下ろされる槍とハンマーが、火花を散らせてぶつかり合う。

「ゼストって言ったか。何企んでんのか目的を言えよ！ 納得できる内容なら、管理局はちゃんと話を聞く！」

「……若いな」

ゼストが言葉を発した直後、彼の周囲に複数の火の玉が現れた。

「ちっ！」

ヴィータが舌打ちすると、彼女の周囲にも白い刃が数本現れる。直後、炎と刃が衝突して爆発を起こし、煙が立ち込めた。煙から離れ、ゼストは槍を構え直す。

「だが、いい騎士だ」

『旦那あ！ 褒めてる場合かよ！』

ゼストの中にいるアギトが叫ぶ。

一方、ヴィータもハンマー型のデバイス『グラーフアイゼン』を構えて、ゼストを見据えている。念話で自分の中にいる、ユニゾンデバイスのラインフォース・ツヴァイに話し掛けた。

『ライン、気付いたか？』

『はい』

念話を繋げたまま、ヴィータはゼストに向かって突っ込む。ゼストも槍を振るって迎え撃つ。

『向こうのユニゾンアタックは、タイミングがズレています。融合の相性が、あまり良くないようです』

ラインがゼストとアギトのユニゾン状態を分析した。

何度目かの打ち合いを終えて、両者離れて距離を取る。
すると、ヴィータの動きを見てゼストがある決意を固めた。

「アギト、融合を解除しろ。俺がフルドライブで、一撃で墜とす」
フルドライブという言葉聞いて、アギトは驚愕した。

『冗談！？ フルドライブなんか使ったら、旦那の体は……！！』
「終わらんさ。成すべき事を終えるまではな！」

槍を構え、強い決意のこもった声で言った。
ゼストの言葉に、アギトは怒りを露にする。

『ふっざけんな！ 旦那の事は、あたしが護るって言っただろ！！』

アギトは両方の手の平の上に、炎を出す。

『旦那の命は削らせねえ！ あたしが必ず旦那の道を通してやる！』

両手を前に突き出して、炎の勢いを増させる。

『猛れ、炎熱！ 烈火刃！！』

アギトが叫んだ直後、槍の刃部分が炎に包まれた。
ヴィータもグラーファイゼンを油断なく構えた。

地上本部の地下道。

ノーヴェとウエンディは、スバル、ティアナ、エリオ、キャロの機動六課の新人四人と交戦中。

銃型デバイスのストラーダを持つエリオが、通路を走り、ウエンディが固有武装『ライディングボード』で、エリオに向かってスフィアを放つ。

スフィアに気付くと、エリオは素早くジャンプをして避ける。その後も同じように全弾避けられて、ウエンディは困った顔になる。

「ちい、ちょこまかと」

「ウエンディ！ この屑、さっさと仕留めろ！」

ノーヴェは黄色い道を宙に作り出して、その上をジェットエッジで走る。

スピードを上げて、銃型デバイスを持つティアナの背後に迫る。ティアナが後ろを振り返ったと同時に、ノーヴェは彼女の顔目掛けて蹴りを放つ。決まったかと思われたが、蹴りはティアナの体を擦り抜け、彼女の姿は消えてしまった。

「なっ！？」

ノーヴェは驚いて目を見開き、床に着地して周りを見回す。

彼女の周りには、沢山のスバル、ティアナ、エリオ、キャロの姿があった。その数は二十を超える。

「うつそお!？」

驚きの声を上げるウエンディ

彼女を取り囲んでいる沢山のスバル達は、ティアナが作り出した幻影である。

だが、ティアナ一人では、これだけの量の幻影は作れない。キャロの補助魔法『ブーストアップ』で、強化されているのだ。

二人は大量の幻影の中に隠れて、必死に幻影を維持している。

『Vision control, load growth (幻影制御、負荷増大)』

『They are energy boot and limit nearness (エナジーブート、リミット間近です)』

二人のデバイスが、マスターに報告した。

キャロとティアナも、必死の表情で踏ん張っている。

(後もうちょっと……!)

(脱出タイミングが出来るまで、頑張つて!)

二人の想いに応えて、デバイスも維持を続ける。

「あたしらの目を騙すって……!?!この幻術使い戦闘機人システムのこと知ってる!？」

「幻術だろうがなんだろうが……要は全部潰せはいいんだろうが!」

右手を構え周りに黄色いスフィアを作り出し攻撃しようとするが、

ギユイイイイイイイイン

「うおおおおお!!!!」

「ぐあああ!!」

幻影の中に紛れていたスバルがノ　ヴェに向かって殴りかかり、腕でガードするもそのまま後ろに飛ばされてしまい体を床に何度も打ち付けながら、吹き飛んだ。

「ノ　ヴェ!!」

「サンダー!!」

上から声が聞こえて、ウエンディは顔を上げた。
頭上に、青い電気を纏ったストラーダを、上段に構えたエリオがいた。

「レイジー!!」

「ちっ!!」

ストラーダが振り下ろされるのと同時に、ウエンディはライディン
グボードを盾にする。

槍と盾がぶつかり合って、火花を散らせる。

エリオが引くとウエンディは膝をつき、周りにいたガジェットは破

壊されてしまった。

「撤退!!」

その隙についてティアナ達はその場から逃げることに成功した。

「・・・この野郎・・・!!」

「うつうつ・・・」

起き上がるノ ヴェとウエンディ

すると目の前にモニターが現れた。モニターにはチンクが映っている。

「ノ ヴェ、ウエンディ、二人ともちょっとこっちを手伝え。もう一機の『タイプゼロ・ファースト』の方と戦闘中だ」

地下の広い部屋で、チンクも紫色のロングヘアの女性。色が違うが、スバルと同じリボルバーナックルを左手に装着している。スバルの姉、ギンガ・ナカジマと対峙していた。

沈黙が続く中、意外な人物がそれを破る。

「ちよいと失礼。戦闘機人とお見受けする」

「！」

突如としてチンクの背後に、緑を基調としたシャツに黒いズボン、そして朱色のマフラーを着ている男が現れた。チンクは警戒心を露わにしてすぐさま臨戦態勢になる。

「なにものだ？」

「名乗らなきゃダメかい？」

「……どうせあんたはここで消えるのにさ」

その男はねちっこく、且つさも嬉しそうに言葉を連ねると次の瞬間にはチンクの目の前に来ており、ニヤリと笑みを浮かべ左腰から抜刀した剣を振り上げる。

ザシュッ！！

咄嗟の出来ごとにチンクは反応しきれず腹を切られてしまう。

「かはっ・！」

「なんだい？戦闘機人といってもこの程度なのかい？・・・それじゃお別れだ」

人を斬るのが大好きだとしても言いたげな口元をし、男は得物を突き立て仕留めようとした。

だが、

ドオオオン！！

チンクを殺るよりもはやく、凄まじい音を立てて、男の顔に木刀がめり込みそのまま吹き飛ばされた。

「っ！」

ギンガとチンクは吹き飛ばした男の方を見た。白く、くせ毛のある髪、そして赤いラインの入った黒いインナーの上に渦巻き模様の白い着物に身を包んだ男、山本健一だった。

「こんなところでまさかまた会えるとはな。え？人斬りゼイオンさんよお？」

後ろからなので表情を読み取ることは出来なかったが、声音を聞く限りは明らかにキレている。ぎりぎり我慢しているといったところだ。

「うれしいね、わざわざ俺に会いに来てくれたってわけだ。」

ムクリと体を起こす男

「……………抜かしやがれ」

健一の鋭い眼光がゼイオンを射抜く。

善人と悪人の違いは誰にも分からない（後書き）

PS：誰か銀さんと超似蔵の戦闘シーン（二回目の時）書いてください。文字でどう現わせばいいのかサッパリ分からん

姉妹でそっくりていう人って結構少ない（前書き）

銀さんと似蔵（二回目）のやつ誰が解説して！！

・・・連載が止まってしまうかもしれへん（汗）

姉妹でそっくりていう人って結構少ない

「念のため聞いてやらあ…。

…こいつがおめえに何かしたか？」

今すぐにでも殴りたい。今すぐにでもチンクを、家族である彼女を斬ったあいつを殴り飛ばしてやりたい。

髪に隠れてよく見えないものの、その奥からわずかに見える健一の眼に揺らめく光が、そう語っていた。

するとゼイオンは淡々と、しかも嬉しそうに語り出す。

「その嬢ちゃんは何もしてないさ。ただこいつの良い餌になってもらっただけさね。こいつは戦えば戦うほど成長する剣でね…。そしてそれを餌にこの剣はどんどん強くなる…。んでもってその嬢ちゃんは戦闘機人ゆえに戦いに特化している…。だから戦えばこいつも強くなるから狙わせてもらったわけだ」
ゼイオンが一通り言い終えた瞬間、

ドゴオオオン！！

先程よりも強烈な勢いで木刀がゼイオンの顔にめり込んだ。

ゼイオンは壁に叩き突けられてしまった。

「イテテッ…いきなりひどいことしてくれるね……ッ！」

自分に飛びかかる影を認識し、顔を上げた次の瞬間ゼイオンの目に写ったのは

1匹の夜叉^{おに}だった。

完全に頭に血が上った健一は、普段の様子からは考えられないほど目を大きく見開き木刀を振りかぶっている。眼球のわずかな毛細血管すらも浮いて見えた。

ガキイーン！！

ゼイオンはすぐに反応して右手を持った得物で健一の一撃を止めると、そこからカタカタと音を立てて鏢迫り合いが始まった。

健一の得物を刃で受け止めるゼイオンは、自分に飛びかかってきた健一の髪の間から垣間見えた形相を見て一瞬、ほんの一瞬怯んでしまったが、それは同時にゼイオンのある考えを確信に至らせることとなった。

（コイツもやっぱりあのと同じ光を持っている。人を惹きつける…蛾を集める…不安定で、攻撃的で、そして哀しい色を帯びたあの光を…！）

「クツクツクツクツ……ああ、ようやくやる気になってくれたかい？ うれしいねえ」

ゼイオンは突如口角を釣り上げた途端、腕からコードの様なものが出てきて、瞬く間にゼイオンの右手と剣を覆ってしまった。

似蔵の右肘から先は四尺ほどの太く歪な形の刀となった！

するとゼイオンの力が急激に跳ね上がり鐔迫り合いから一気に押し返すが、健一とて負けておらず直ぐに飛び退いたと思いきや、再び健一へ斬りかかった。

「てやあああつ！！」

ガキンッ！

木刀と刀がぶつかって激しい火花が起こり、風が巻き起こる！！

近くにいるチンクやギンガのところにも強烈な風が迫り、二人がそれを健一の剣圧だと理解するのに時間はかからなかった。

カンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカン！！

「うおおおおっ！」

そしてそれを皮切りに、健一の嵐のような連撃が繰り出される！！

ある時は右に払い、ある時は上から振り下ろし、ある時は左に薙ぐ。

怒りで我を忘れた健一の攻撃は水のように雲のように！掴もうとしても掴みきれずに様々に変化する！！

だが対するゼイオンも伊達に剣の道の達人ではない。

ましてゼイオンの得物である紅い剣が似蔵の身体能力をも向上させているので、ゼイオンはそれを全て受け止めるどころか、逆に晋一を押し始めたではないか！

そしてゼイオンは居合の要領で刀を左に構え健一に肉薄し、

「殺し合いは楽しいねエ…そう思わんかね？」

バキリッ！

健一の木刀を砕いてしまった！！

健一の得物を砕いたゼイオンは、“終わりだね”とニヤリと笑ったが、健一は咄嗟にその破片の、ちょうど木刀の先端に当たる部分を素早く掴むと、それをゼイオンの肩目がけて突き刺した！！

「グアアアアアアアアア！！！！」

絶叫と共に、肩の痛みの余り怯んでしまった！！

ここぞとばかりに右手に持った木刀の破片を振り下ろさんとする健一。

しかしいきなり健一の胸から血が溢れだす。そう、先程木刀を砕かれた際、すでに斬られていたのだ！

一瞬気を取られた健一だが、これがゼイオンの態勢を立て直す時間を作ってしまった！

すぐにゼイオンの方に向き直るも、もう遅く…

ズドオオオオン！

背後にあった壁と挟まれる形で刀で健一の腹に突き刺さった！！

そして晋一の吐きだした血が地面に流れ真っ赤に染めていく。

「け、健一　iiiiiiiiiiii！！！！」

チンクの叫びも虚しく健一はガクリと項垂れる。

「アンタからもあの人の同じくらい光を放っているのが見えるんだがねエ……」

だが、腹を突き刺されてもなお輝きを失わない健一の目は、死ぬどころか逆に余計に輝き出し、もはやおぞましい域にまで達していた。限界まで見開かれ、小さくなった瞳には光がギラついており、充血もこれ以上ないほどひどいものとなっていたのだ。

「ぐ……………ぐが……………！」

「そんなにキレイな光を放っているのに、どうやらアンタからは妙な光も混じって見えてね…例えるならそう…剣だ。

鞘から抜き放たれた鋼の刃…するどく光る銀色だ。

だがどうしてかな…？

どうにもこの色は……………気に入らねえんだ！」

ぎりぎりと奥歯を噛みしめ、獣のような呻き声を上げて刀を押さえる健一をよそに、ゼイオンは1人で喋り出す。

しかし…

ガシッ！

「なっ……………！」

健一が剣を握る力を強めると、ゼイオンは驚いた。無論強い力で刀を押さえる分、左手はより深く刃に食い込み、血が溢れ出てしまう。

だがゼイオンが驚いているのはそこではなかった。

（ぬ… 抜けない…！）

そう、刀が前にも後ろにも動かなくなっていたのだ！

人間の握力とは思えないような力で刀を握る健一に若干冷や汗を掻くゼイオン。

何を血迷ったか、健一はそのまま剣を握り潰そうとさらに力を強める。

すると突然ゼイオンの真上に人影が現れた！

それはゼイオンに肉薄すると、

スパアアン！！

剣と一体化していたゼイオンの右腕を叩き斬った！

肘から綺麗に飛ばされた腕はそのまま重力にしたがって似蔵の数メートル後方へ落下した。

だが、腕を飛ばされ右側が鮮血に染まったのはゼイオンというと、まるでイタズラした子供を叱る教師のような、困ったという顔をしていた。

「アララ。腕が取れちゃったよ。酷いことするね嬢ちゃん」

支えを失った健一の体はふらつと地面へ崩れ落ちる。だが生憎、今その影には倒れた健一を支えるほどの余裕は無かった。

「・・・それ以上近づいたら次は左手を斬りますよ！！」

健一の窮地を救ったのは、頭にカチューシャをつけた、茶色いロン

グヘアーのディードであつた。健一の様子が心配になり作戦を無視してオットーとともに健一の後を付いていたのだ。オットーはチンクのそばに行き介抱している。

「どうやら小うるさいのが来ちまつたようだ。勝負はお預けだな。まあまた機会があつたら殺り合おうや」

そういうとチンクに呼ばれてきたノヴェとウェンディがちょうどやってきた。

「行きましたか・・・大丈夫ですか健一・・・健一兄様？」

ディードが振り向いた時、そこに倒れているはずの健一はおらず、代わりに健一が流した血と粉々に砕けた木刀が散乱しているだけであつた。

ちょうどその時ゼイオンは今いる場所から上にある階段まで飛んで逃げようとした。だが、

「うおおあああああああつ!!」

その上を、ゼイオンの頭上、健一は飛び上がって襲いかかろうとし

ていた。

地面より数メートル上にある階段の、さらにその上まで飛ぶ健一の跳躍力にそこにいる者は驚嘆し、啞然としていた。

そして胸から下にかけて血まみれになりながらも、健一はゼイオンを木刀の破片で殴り飛ばす。

“怖い…ぞつとする…”それが彼を見たギンガの心だった。

もうとつくにゼイオンは逃げてしまったが、どてっ腹に風穴を開けられてもなお健一はふらふらとおぼつかない足取りで、まだ追いかけようとする。

「……………ッ！」

だがそんな彼もついに体の消耗には勝てず動けなくなってしまった。

むしろあれほどの傷で今まで暴れていたのがおかしい。

死に体だが、オットーやチンクがいるところまでなんとか歩いていく。

健一にはもうそれでいいだった。

「健一！！しっかりするっす！！」

ウェンディが近づき健一を支える。するとトレから連絡が入った。

『ウェンディ！！急いで戻るぞ！！』

「な、何があったんすか！？」

『ウノからの連絡でラボが襲われたらしい！今すぐ戻るぞ！！』

「りよっ、了解っす！」

ウェンディは健一を担ぎライディングボードに乗った。

「みんな！急いでラボに戻るっす！！トレ姉の連絡でラボが襲わ

れたらしいっす！」

「なっ！」

ラボが襲われたことに驚愕するノ ヲヱ達。

ノ ヲヱは急いでチンクを抱えてその場を去ろうとした。

「あっ！待ちなさい！」

我に戻ったギンガが健一達がその場を去ろうとするのを静止しようとするが既に遅く、逃げてしまった。

一人その場に残ったギンガはただ、呆然としていた。

謎の男が持っていたまるで生き物のような剣のこともあるが、健一の事の方が大きい。

彼の怒り狂った表情だけでなく、その行動も怖かった。怒りに身を任せ、剣を振るう彼の姿も。

まるで鬼のような

「ギン姉！！」

呆然としていると後ろから声がしたので振り返ると

「スバル！」

自身の妹であるスバルが来ていた。どうしてスバルがここに？

疑問に思ったギンガはスバルに質問した

「どうしてここに？」

「ギン姉に連絡してもでないから心配して来たんだよ！」

連絡？そんなものが来ていたのだろうか？……いや恐らく来ていたのだろうが気が付かなかったのだろう。あんな怖いものを見せられたら

「とにかく無事でよかった！」

「え……ええ心配かけてごめんね」

安堵するスバルだが、ギンガの思考はまだ覚束ない。

「何があつたの？」

「ええと……」

スバルの問いに答えることが出来ないギンガ。何をどう話せばいいかわからないからだ、何故ならギンガ自身もまだ理解しきれていない。

物語（戦い）が遂に始まる

姉妹でそっくりていう人って結構少ない（後書き）

ちなみにゼイオンがあの人と言ってる人はラン・アーカスです。
感想＆評価お願いします！！

現実結構醜い（前書き）

短い展開が急すぎる・・・・・・文才ほしい

現実結構醜い

ト レ達が撤退してる間、地上本部は第三勢力に襲撃されていた。

「なんだ！？あの黒いガジェットは！？」

局員の一人が叫んだ先にあったのはスカリエッティとは違うガジェットだった。

黒いガジェット つまりS級犯罪組織「ヴェンテット」が奇襲してきたのだ。

もちろんスカリエッティ達が襲撃するのは知っていてでの行動だ。
ト レ達がない間にラボを襲いレリックを持ち去ったのだ。そして機会を伺い地上本部を襲撃し始めたのだ。ガジェットは局員たちを次々と襲い始め、殆どがやられてしまった。

地上本部はほぼ壊滅状態になってしまった。

そんな状況下に地上本部に映像が映し出された。

『クククク・・・聞こえるか？管理局の地上本部ども？』

不敵な笑い、そして狂気に満ち溢れた声が流れた。

「こ、これは!？」

はやてが出てきた映像に驚く。

『てめえらご存じの通り、次元犯罪者ラン・アーカスだ。今回の襲撃は饞別だと思ってくれ。クククク・・・にしても無様だなあ、このくらいでやられるとは、とんだ期待外れだな!』

「貴様・・・!」

レジアスが怒りに震えるがアーカスはさも嬉しそうに話を続ける。

『クククク・・・中にも見知った奴もいるがどうでもいい・・・・てめえらに良いことを教えてやる。俺らはレリックを数個持っている。スカリエツテイのアジトからな、がら空きになっているところを襲って頂戴したのさ!』

「なんやて!？」

「一体どうやってスカリエツテイのアジトを!？」

驚くはやてと一体どうやって見つけたのか質問するカリム

『クククク・・・何故知ってるかって?てめえら管理局のトップ最高評議会の奴らから聞いたのさ!脅したらさっさと話してくれたぜ?』

「最高・・・評議会?」

何の事だかわからないはやてだが何人かがざわついている事に気づいた。

『そして俺はそれを使ってこの世界を滅ぼすつもりだ。』

「なっ！なぜそのようなことを！？」

カリムがアーカスを睨みながら訊くと、アーカスはカリムの方を見てこう言った。

『なぜかって？んなもん憎いからにきまってんだろ。』

「そんだけの理由だけで世界を滅ぼすのか！」
転生者の一人、衛宮が声を上げる。

『ああそつさ、そんだけの理由で滅ぼすんだよ』

アーカスの憎悪が籠った眼が衛宮を射抜く。

『さあ管理局ども俺を止めてみる！腐敗した組織で止められるものならな！』

通信は切れ局員達は恐怖と疑問が湧き出してくるが、中には青ざめる者もいた。

そして燃えている地上本部の映像だけが残っている。

はやて達はただその光景を見ていることしかできなかった……。

スカリエッツィのアジトにて

ヴェンテットの襲撃を受けてアジト内部はボロボロの状態だったが、幸いなことに研究室とナンバーズの調整室は無事だった。

研究室にはチンクと健一以外の人が集まっていた。チンクは人斬りから受けた傷を直す為、調整中だ。健一は手当てをし安全な場所で寝かせている。ちなみにヴィヴィオはウノに抱えられてる。

「とりあえず全員無事……とは言い難いね」

最初に口を開いたのは頭に包帯を巻いたスカリエッツィだった。

「ドクター大丈夫ですか」

セツテが心配そうに聞く。

「私の方は何ともないよ。むしろチンクと健一の方が傷は深いからね」

「チンク姉と健一を傷つけやがったあの人斬り野郎……ぶっ潰す！」

「ただぶっ潰すだけじゃだめよ、徹底的に潰さない」と

チンクと健一が傷ついて相当怒っている。ノヴェは教育系だったチンクによく甘えていた為、慕っている姉を傷つけられて怒り心頭といったところだ。健一に対しては絶対に口にはしないが大切な家

族と思っている。その家族が傷つけられたら怒るも当然だろう。それに珍しくクアットロも少しキレ気味に見える。

「チンクお姉さんに健一お兄さん大丈夫かな・・・」

「大丈夫よ。ヴィヴィオ」

そう言ってヴィヴィオの頭をなでるウノ。

「チンクに比べて健一の方が傷が深い・・・もし健一が来てなかったらチンクは確実にやられてただろう」

そう述べるトレ。

「にしても・・・厄介な物を作ってくれたね彼は・・・」

そう言っただけモニターに映っているゼイオンが持っている紅い剣を見るスカリエッティ。

数時間後、場所は変わりある一室に一人の人影がいた。

「ハア・・・ハア・・・」

右肩を抱え、苦しそうにしているゼイオンだった。

「お取り込み中のところ失礼するぜ」

アーカスが部屋の前に来て、ドアのところによりかかった。

「・・・例の男とやりやったらしいな。立派なデータは取れたのかい？。デアもさぞ嬉しいだろうな」

「クククク・・・あの男は実に面白いね。あんたと同じ目をしていたよ。それだけじゃない・・・血の臭いだ・・・あの男は相当人を殺しているね」

「ほう・・・そいつはおもしれえ」

不敵な笑うアーカス。

すると、右肩に巻いている包帯が取れ、そしてゼイオンの右肩から無数のコードが出てきて紅い剣と繋がったではないか！

「へえ・・・仲良くやっているようで安心したよ。」

しかしそんな光景を見ても平然としているアーカス。

「後少ししたら管理局の局長のもとやり合つことになる。……
精々頑張ってくれよ。」

そう言ってその部屋を去るアーカス。

現実結構醜い（後書き）

ジェレミアとスカって中の人同じ何だね。こないだ知った。

「オレンジじゃないスカリエツティだ」

ネタにできる・・・

番外編その二っぱいの（前書き）

どら焼き食って、製造会社見たら、株式会社プレシア、だった。

眼見したおれは悪くない

番外編その二っぱいの

「今日の訓練はここまでだ」

ト レが訓練の終わりを告げた。

この言葉を聞いたナンバーズは、やっと終わったすゝ、や、あゝ疲れたー、などと言い、訓練室を出るのだが、

「健一……大丈夫？」

「……大丈夫じゃねえ……」

木刀を松葉杖代わりにして歩いている健一に話しかけたセイン。

「何で毎回俺ばっかあいつの相手をせにゃいけねーんだよ。っていうかあの戦闘馬鹿をどうにかしてくれってんだよ。こんちくしょうめが。」

毎回毎回何で俺がト レの相手をしなきゃいけねーんだよ。これだから戦闘狂は……。

と、ぶつぶつ文句を言いながら訓練室を出る健一。

「俺ア先に風呂はいらせてもらっぜ」

「あ、うん」

そういつて風呂場の方に向かって歩いて行った。

「あらー健ちゃんじゃないのー随分おもしろいことになってるじゃないのー」

腹黒い笑みを浮かべボロボロになっている健一に話しかけたクアットロ。

「うるせーよ。この腹黒女、胸揉みたくっぞこの野郎」

「あらーセクハラは良くないはよー」

「セクハラじゃねえ。嫌がらせだ」

「いやもつと良くねえだろ!？」

健一のセクハラ発言にツツコムノ ヴェ。

「にしても・・・これから風呂入るのかしら？」

「そーだよ。文句あつかゴラァ」

「ふふふ・・・べっつにー」

妖しげな笑みを浮かべながらその場を去るクアットロ。

何だったんだ？あいつ？と思いながら健一は風呂場に向かった。

風呂場の前に到着した健一はドアを開けたそこには

「えっ!?!」

中にはバスタオルで髪の毛を拭いていたウノがいた。まあ、要するに全裸である。

ウノは顔を真っ赤にして目の前にいる健一を見つめた。

この時健一が呟いた言葉は、

「何、このT O O V E 的な展開」

だった。

「キヤアアアアアアアア／／／」

ウノは近くにあった洗面器を持ち健一に向けて思いっきりブン投げた。

「ぐふあっ」

顔に洗面器が直撃した健一はそのまま後ろに倒れ込んだ。

「す、すいません／＼」

「いや確認しなかった俺も悪かったしいって別に」

洗面器がぶつかった位置を手で抑えている健一に頭を下げるウノ。ちなみに騒ぎを聞きつけ他のナンバーズも来ている。

すると健一は黒い笑みを浮かべているクアットロを睨んだ。

「おいてめえ、知ってただろ」

「何のことかクアットロサッパリわかんない」

体をくねらせながら誤魔化すクアットロだが確実に知っていると思っ健一は思った。

「健一」

「あん？」

ウエンディが健一に話しかけた。

「ウノ姉の胸は大きかったっすか？」

とんでもない質問をしてきた（笑）

「ちょ／＼ちよつとウエンディ／＼」

「あー確かにでかったなー」

「健一さん！！／＼／」

ウェンディの質問と健一の返答のせいで顔がトマトのように真っ赤になっているウノ。

「て、何セクハラ発言してんだこのエロおやじ！！！」

「ぶふおあつ」

健一のセクハラ発言に切れたノヴェが健一の顔面を思いっきり殴り飛ばした。

「え・・・ちょ・・・！」

吹っ飛ばされた健一はそのままクアットロの所へ、そして

「キャー！！」

そのまま健一の下敷きになってしまった。

おまけに体勢が健一がクアットロを押し倒しているように見えなくもないという状態になってしまった。

「・・・・・・・・」

気まずい雰囲気になってしまい、沈黙してしまったノヴェ達。

「いや〜ん。健ちゃんに襲われる〜」

一名を除いて。

「まったく、ひでーめにあつたぜ」

あのあとなんやかんやで落ち着いた健一は一人酒を飲んでいた。

「む、健一か」

するとトレがこちらに歩いてきていた。珍しく私服である。といつてもよくあるスーツ姿だけど。

「おート レか珍しいなオメ が服着てるなんて」

「まあな、それよりもそれは何だ？」

ト レは健一が飲んでいる酒を指差す。

「酒だよ、飲むか？」

「ふむ、頂こう」

健一はお酒をコップに入れト レに渡し、ト レは受け取ったコップを飲んだ。

その光景を遠くからこっそり隠れてみているウ ノとセイン、そしてノ ヴェがいる。

「何かいい雰囲気になってるね」

「・・・こんな事して後で怒られてもしらねーぞ」

「まあ、いいじゃないの。にしても・・・ああしてみると本当に普通の女の子みたい。たまにはこうしてハメを外して休んでいいのよ、ト レ」

ウ ノはまるで母親かのように両手でコップを持ちお酒を飲むト レの事を見つめる。

ヒック

「オイてめーばつか飲んでないで俺にも注げよ、ったく」

文句を言う健一だがト レは何も言わずコップを健一の前に出す。

「？」

ヒック

「つげ」

「……え？」

ト レは近くにあった酒瓶を掴み、

「酒が足んねーつつてんだ！！樽ごと持ってこんかいワリヤアアアアアアア！？」

健一の頭目がけて思いつきりブン殴った！健一は気絶し後ろに倒れ込んだ。

-
-
-
-
-

え
え
え
え
え
！
？

「だ・・・だ・・・だ・・・誰エエエエエエ！？アレエエエエエエエ！？」

酔つ払つたト
レを見て声を荒げるノ
ヴェ。

ト
レはそのまま別の酒瓶を掴み一気飲みし出した。

「お酒たった一杯で別人に豹変しちゃったんですけどオオ！ハメ外すっていうか何か別の大切なモノが外れちゃったみたいなんだけど！！」

トレは健一の胸倉を掴み起き上がり、せ頬にビンタを何発も喰らわせる。

「全然普通の女の子じゃないよねアレ!! ねエ!! 何アレ!? 立ち

飲み屋のオッサンだよね!!」

「健一いいいい!!健一が殺されるう!!」

トレは酒瓶を健一の口の中にぶっ込んだ。その拍子で意識が復活した健一は口の中に入った酒を吹いた。

「オイ・・・起きろよオ。早々とつぶれてんじゃないよ。夜はまだこれからだろオ」

健一は咳込みながら後ろに下がり冷や汗をかいている。

誰?この子?おっさん?おっさんだよね!?俺知り合いにおっさんなんかいないよ!?

「あ・・・スイマセンちょっと急に意識が・・・飲みすぎちゃったかな。おかしいな?もう寝た方がいいかも」

「あゝん!?てめエあたしの酒が飲めねえってのか!?!」

「冗談ですよゝ勘弁して下さいよゝトレ様。朝までお供しますってばゝ三千世界の烏をブチ殺して朝までお供しますってばゝ」

酒を飲んで豹変したトレにビビる健一。

「つかトレ様・・・俺いつからトレ様と飲んでましたっけ?」

「ごちゃごちゃうるせーんだよ!?そんなにあたしと酒飲むのが嫌か!?!殺すぞコノヤロ!!!」

暴走し出したト レを遠くから呆然と見ているウ ノ達

「し・・・知らなかったあの娘があんなにお酒に弱かったなんて・・・
。そっいゃこれまで一度も飲ませたことなかったわ」

「・・・弱いつてレベルじゃないだろ。アルコールから未知なる力を抽出してるよ」

「よし酒も入ったしそろそろ座敷遊びでもするかア。あっちむいてホイ。」

「い・・・いや、いいです。僕アト レ様の隣で飲めるだけで幸せですからハハハッ」

誰かヘルプミ !!!

「知ってるだろ。負けた方が罰で一枚一枚脱いでいく奴」

脱いでいくつとこ強調しなくていいから！

「いやいいですってば。ト レ様ムリしなくていいです」

「なんだ！？私の裸が見たくねーのか！？興味0か？あん！？」
シャツのボタンをいくつか取るトレ

興味0っていうか後々後悔することになんだよ！あんたが！

「い・・・いやそんな事ないですよ。ただトレ様今酔ってるから
後で後悔しますよ」

するとトレは鼻笑いを誇らしげな顔をする。

「見たいんだ〜エロい〜健一エロい〜」

ギャルみたいに指を動かす。

「メンドくせっ！！トレ様ひどくメンドくせっ！！」

「それじゃあ私が負けたら服一枚一枚脱いでいくから、お前、負け
たら一枚一枚脱げ・・・・・・・・皮を」

「トレ様！！辞書でフェアっていう字調べて！！赤線引いて！！」

健一の言葉を見殺してじゃんけんをし始めるトレ。

「それじゃあいくよ、ジャンケンポン」

トレはグー、健一はチョキ。

「げっ!!」

「あっちむいてホイいいい!!」

人指し指で思いっきり健一の頬をブン殴るトレ。

「トレ様コレもう既に罰になってるうう!!」

倒れそうになるが足を後ろに置いて何とか持ちこたえた健一。

「ジャンケン」

無情にもトレはジャンケンを続け出した。

「ポン」

今度は健一がグー、トレがチョキ

うつしゃああアアアアア

「あっちむいてホイ」

健一は人指し指を上に向けると、トレは顔を上にあげてる。

勝った!!

そう思ったのもつかの間、トレは健一の指をボッキッとへし折った。

「トレ様勝っても結局コレ俺負けてるう!」

ギヤーギヤー騒いでいるトレを遠くから見ているウノ達は・・・

「フフ・・・トレったらホントに楽しそう。ああしてみると本当にただの女の子みたいね」

「どこがアアアア!?!」

ウノの女の子発言をツツコムノヴェ。

「よし次はかるたでもやるかア!!!」

トレの目がキラーンと光る。

「オイそこの隠れてる奴らもこっちに来い!3秒以内に来ないと殺すから」

その言葉を聞いて青ざめるウノとセイシとノウエ。

「ハイ1、2・・・」

「これは一体何があったのだ……？」

ものすごく散らかっているあたりを見回すチンク。

近くに健一が寝っ転がっていた。

「おい起きろ。何があったんだ？」

健一の体を揺さぶると健一が起きた。

「いてて……ひで めにあつたぜ……」

意識が覚醒した健一だが立てないでいる。

「ほら掴め」

そう言って手を差し出すチンク。

「おう、サンキュー」

差しのべられた手を掴む健一だが、

「あ」

健一が起き上がろうとして体勢を崩してしまい、チンクを押し倒してしまった。

色々この状況はまずい・・・！

すぐに離れようとしたが、

「何ここお酒臭・・・」

運悪くディエチが来てしまい、気まずい雰囲気の流れる。

なぜなら目の前に健一がチンクを襲っている様に見えるからだ。

「お、おじゃましました」

急いでその場を去るディエチ。

「あ、待てディエチ／＼」

「ご、誤解だ――!!」

くおまけく

『妖刀・星砕、今なら1万1200円でお買い得』

』

「あ、もしもし、はい、いつもどおりで阿寒湖でおねがいします」

番外編その二っぱいの（後書き）

ラッキースケベな健一でした。（笑）

感想って何書けばいいのかサッパリ分からない、と現代文40と数学?94取っ

タイトル通り

感想って何書けばいいのかサッパリ分らない、と現代文40と数学?94取っ

S級犯罪組織『ヴェンテット』による管理局地上本部襲撃から一週間、隊舎を失った機動六課は廃艦予定だった次元航行艦アースラを移動可能な拠点としていた。

「みんな集まったな?指揮系統もようやく落ち着いた所で、みんなに聞いて貰いたい事があるんよ」

スターズとライトニング、そしてギンガと転生者組が席についた所で部隊長である八神はやてが口を開く。

「捜査に関しては進展なしや、相変わらず地上本部は協力を拒んでる。だから六課はレリック事件の捜査、その捜査線上にスカリエッティがいるっちゅうスタンスや。ここまでは一昨日も話したな?」

全員が静かに頷いたのを確認し、はやては話を続ける。

「せやけど、今回は違う。地上本部の襲撃は確かにスカリエッティも絡んでおる、けどこの人物……」

そう言うてはやてはモニターを出した。

「こいつは……」

そのモニターに映っている人物、『ヴェンテット』リーダーであるラン・アーカスだった。

「この人物はみんなも知ってる通りS級犯罪組織『ヴェンテット』」

のリーダーであるラン・アーカスや。今回の地上本部を壊滅状態にしたのもほぼこの人物や」

はやては映し出されているモニターを見ながら話を続ける。

「この人物がどうかしたのですか？」

はやてに質問をするティアナ

「このラン・アーアスという人物、あまりにも不可思議な点が多すぎるんや」

「え？」

「経歴・出身が一切分からんのや」

「それは一体……」

「うちも調べてみたんやけれど……ほとんど犯罪履歴しか出てこなかったんや。それだけじゃあらへん……今回の襲撃あまりにも手際が良すぎるんや。地上本部の構造だけじゃない……スカリエツティが地上本部を襲撃することも……まるで知っていたかのように」

はやての話を聞いていると通信が入った。

『ちよつといいかしら』

「母さん!？」

通信を入れたのはフェイトの母親であるプレシアだった。突然の通信に驚くのは達。

「どうかしたんですか？プレシアさん」

『ラン・アーカスについて分かったことがあるのよ』

「本当か!？」

士郎が席から立ち上がる

『彼は「元管理局員」よ』

「え!？」

元管理局員、その言葉を聞いて戸惑いを隠せないのは達。

「元管理局員でどう言う・・・」

『正確には「局員の儘だった」よ』

話を続けるプレシア。

『今から8年前、彼は犯罪組織のアジトに部隊を率いて潜入し、制圧しようとしたらしいが敵の罠にかかり、それでも健闘したが最後は敵組織がアジトごと自爆したため部隊も全滅した……』と言う事になっているわ。その時に生き残ったのは彼も含めて誰もいないはずなの』

「あつ、あの！」

スバルが手を上げて質問した。

「そのラン・アーカスっていう人は死んだことになっているのにどうして生きているんでしょうか？それに元管理局員なら皆知ってるんじゃないですか？」

スバルの言う通り死んだ事になっている人間が生きているのはおかしい。それに元局員なら皆知っているはず。

『そこら辺については分からないわ何故彼が生きているのかわね。後者の方は……考えたくないけど、上層部が情報操作していたんじゃないかしら。可能性があるとしたらそれくらいね』

プレシアが話し終わった瞬間、艦内に警報が鳴り響いた。

「何だ！？」

『ミットチルダ上空に突如巨大な航行艦が出現しました！』

局員の一人がそう告げる。

『モニター出ます!』

モニターが映し出され、そこに映し出されたのは

巨大な黒い航行艦だった

感想って何書けばいいのかサッパリ分らない、と現代文40と数学?94取っ

次回は番外編かなー

誰かドウ エさんと健一の話書いてくれないかなー(チラッ

ふうー・・・小説書くのって結構疲れますね。

っていうかさっさとこの話終わらせたい(ノ。)(ノ。：。

！……………

感想と意見お待ちしております

番外編っていうか途中話？（前書き）

黒部さんからのリクエストです。

健一の過去がちょっとわかる。

番外編っていつか途中話？

スカリエッツィのマジトの近くにある湖に健一は一人座り、日が落ちて薄暗くなった空を見上げていた。

健一は何もせずただ空を見上げていた。

しばらくして、後ろから足音が聞こえてきた。

「こんなところにいたんだ」

足音の正体はディエチだった。健一は後ろを振り向きディエチであることを確認した。

「よオ、ディエチじゃねーか。どうした？」

「ドクターが後で来て、だつてさ」

「あいつが？……分かった、後で行く」

それなりに受け答えをする健一の隣に座るディエチ。そして健一の方を向き口を開いた。

「昔の事、考えてたでしょ」

「!」

自分が今、何を考えているかをあっさり当てられた事に驚愕する健一。ディエチはそんな健一を見て微笑む。

「結構顔に出やすいんだよ、健一は」

「……まじで？」

「まじで」

はあ、と溜め息をつく健一を面白そうに見つめるディエチ。健一は空を見つめ、真剣な顔をしながら口を開いた。

「……時々、考えちまうんだ。自分が居た世界の事を……親父を、俺の大切な、たった一人の家族を奪ったあの世界を。それだけじゃない……俺を殺そうとして、逆に殺された奴を。そして人として生きられなく成っちまった奴等の事も……親父を殺した奴を殺した自分自身の事も……な」

「……………」

淡々と自分の過去を話したす健一をディエチは静かに聞いて、健一と同じように空を見上げていた。

「……私は健一じゃないから分からないけど……昔の事を考えるよりも今を見つめて、生きた方がいんじゃないかなって私は思うな」

その言葉を聞いて健一は短く鼻で笑い、そうかもな、と小さく呟きながら立ち上がった。

そしてズボンのポケットから、ある、物を取り出した。それはUSBメモリの様なものだった。

「それって……前に言ってたやつ？」

「ああ」

健一は短く返答し、USBメモリの様なものを握りしめ、大きく腕を振り上げそしてそのまま

ポチャン

「あ、あああああああああ！」

湖に投げてしまった。予想外の行動にディエチは大きい声を上げ目を丸くした。

「何やってんの！？健一！？あれはお父さんの」

「いいんだ」

ディエチは健一の方を振り向き顔を見ると、健一の顔は少し寂しげ

な顔をしていたがとても

とても晴れた顔をしていた。

.....

しばらく無言の状態が続いたが、健一は湖に背を向けそのまま立ち去ろうとした。

「あ…待ってよ健一！」

健一が動き出した事に気づき、後を追いかけて隣を歩くディエチ。

ねえ、健一

んーだよ

あたし達、家族だよね

……あつたりめーだろーが

番外編っていうか途中話？（後書き）

次回はセインかな。っていうかしばらく本編無理ぽ。

誰かドウ エと健一の話書いてくれないかな。案でも構いません。

あと少し早いけどメリークリスマス。

番外編その二つぱいの（前書き）

次回からは本編です。・・・たぶん。

番外編その二つぱいの

ミットチルダの市街地に健一とセインは買い物に来ていた。

理由？ナンバーズの奴らがバカス力飯食うからに決まってるだろ。

健一とセインはふらふらとあちこちを歩いている。

「ねえねえ！あれ食べたい！」

セインはアイスクリーム屋を指差しながら健一の服を引っ張る。

「あゝん？」

対して健一は面倒くさそうにアイスクリーム屋を見る。

「あんなもん、今度でいいだろーがあんなのに金使うよりパセ」

「いいじゃん！いいいいいい！」

「おい・・・」

セインは健一の腕を掴みアイスクリーム屋に向かって歩いて、め

んどくせーな」とぼやきながら健一は腕を引つ張られながら付いて行った。

「おばちゃん！アイス一つ！」

「あいよ。おや？そっちの子は彼氏かい？仲がいいカップルだね」

「いや……まあ／＼」

おばちゃんのカップル発言に照れながら頭をかくセイン。反して健一の方は、

「おゝいババア。誰と誰がカップルだって？ん？」

と、店員のカップル発言を否定するが店員の方は全く聞いてない。

「はいよ。これはサービスだよ、持っていきな」

「わーい！ありがとうおばちゃん！」

自分が無視された事にカチンときた健一は店員に向かって言った。

「おいババア、無視してんじゃねーぞコラア。聞こえてんのか？あん？バーカ、バーク」

グサツ（フォークが刺さった音）

「アイスおいしいね！」

「あそーよかったねー。・・・イテテテ、あのババアぜってー聞こえてだろ」

フォークが刺さった頭を手でさすっている健一をよそに、セインはおいしそうにアイスを食べる。

「ところで、健」

「ん？」

アリスを頬張りながら話しかけてきたセインの方に顔を向ける。

「ドウ エ姉と一緒に行動してるらしいけどどんな事してるの？」

「んーそーだなー・・・」

ドウ エとどの様な事しているかと話し始めた健一。

と、言うわけでこっからはドウ E s i d e ぞーぞ。え？なんでドウ エ？こまけーことはきにすんな！

山本健一

私が最初に抱いた印象は、死んだ魚の様な眼をしていてだらけている、例えるならまるで駄目な男略してマダオだった。しかし、今日の前にいる人物は

「おいこら、金よこせ。後ついでに人斬りについて知ってること全部話せやゴラァ」

「ひいいい」

ただのチンピラにしか見えない……。

それに健一？人斬りはついでじゃないでしょうが、それに金をよこせとはそこらへんのチンピラと変わりませんよ？……ハア、しかし皮肉にも人斬りについての情報が手に入るのも事実ですし……。

「お、俺が知ってるのはそれだけだ！た、頼む殺さないでくれ！」

人斬りに関係のある人物の男は健一に押し倒され胸倉を掴まれた状態で助けを請う姿を見せる。はっきりいって無様ですね。

「安心しろ、殺しはしねえよ」

「ほ、ほんとか！」

健一の言葉に安堵する男だったが、

「フオアチャアアア！！」

思いつきり顔面を殴り、吹き飛ばされた男は壁にぶつかり気絶しました。

「確かに殺しはしねエと言った．．．．！だが、殴らねエなんて一言も言ってねえぜ．．．！」

．．．．なるほど確かにそうですね。にしてもなかなかのS．．．．
って違う違う！

「健一、毎回思っんですがやりすぎです」

「いーんだよ。こついう連中はこれくれーやんねーと」

鼻くそを穿りながら言う健一。汚いからやめてください。

「さてと、今日はこれくらいにしてとつとずらかるとしますかね、証拠隠滅してから」

さらつと証拠隠滅って言ってますけど一体どこから隠滅の仕方を学んだのかしら、ずる賢いというか、なんというか．．．．けど、不思議と嫌いになれない人ですね。妹達が好意を寄せるのも分からない事ありませんね。

「やることやつたらパチンコにでも行くとするか」

「……やっぱりただのマダオですね。まあ、それは置いて、さつきから気になってる事が……」

「健一、その服は……」

「ん？ああ、これか似合ってるだろ」

健一が来ている服、蝶柄のまるで女物のような派手な着物……なのですが何故かとても似合っているのは何故でしょうか？

「それは一体どのような服で？」

「これは着物つってだな……まあ日本の服みて　なもんだ、一応クラナガンでも売ってたぜ」

日本？……ああ、健一の出身地ですね。今度来てみようかしら……。

「まあ、そんな事よりさっさと帰ってめし食おうぜ」

「はい」

健一の料理は最初意外においしかったですが、まあ……おいしいですね。今日は何を作るのでしょうか……。ん？私、餌付けされてる？いやそんなことは……。

くおまけく

「さてと、風呂入るとするか」

「健一・・・体洗ってあげる」（オットー）

「健一兄様の体は私が洗います！」（デュード）

「健一の体は私が洗います」(セツテ)

バチチッバチチッ

三人睨みあう

「ねえ、君達ちよつと何してくれちゃってんの、ねえ聞いてるの！
？ていうかどうしたらいいの俺！？答えてくれッッキイイイイイ
イーーーー！！」

『I don't know』

番外編その二っぱいの（後書き）

ツクヨミ 愛称：ツッキーです。

次回こそは本編—————！！

P S：うちの兄がもうすぐセンター

魔法って聞かれてすぐ使いこなせる奴は最早天才レベル（前書き）

展開が速いかもなー

魔法って聞かれてすぐ使いこなせる奴は最早天才レベル

「遂に…遂にこの時が来た…！」

黒い剣を持った一人の男が喜びに震えていた。

「遂に滅ぼせる…！この世界を…！俺から大切なもんを奪ったこの世界を…！」

その男は怒り、憎しみ、喜び、悲しみ、様々な感情が込み上げていた。

「レリック砲台のほうは準備が完了しているか？」

男は白衣の服を着ているもう一人の男の方に振り向き話しかけた。

「もちろん完璧だ！これさえあれば世界などあつと言つ間に滅ぼせる…！」

「そうかい…。ならあれを市街地に転移させる。管理局の上層部どもにいじられ、人として生きられなくなった哀れな奴らをな…！」

ククククク…アハハハハハハハハハハ！！

狂喜のあまり大声をあげるその男
ラン・アーカス。

だがその眼はどこか哀しみを帯びた眼をしていた。

場所は変わって市街地、そこにいる市民は空にある黒い航行艦を見上げていた。

しかしその視線は地面に現れた転移術式に変わった。

「つ、次から次へと一体何だってんだ！」

市民の一人がそう叫ぶ。

転移術式から現れたのは

「――！！！」

声にならない叫びをあげた異形の者どもだった。

よくよく見れば人のような形をしているが市民はそれどころではなかった。

「――！！」

その異形は市民の一人に襲い掛かってきた！

「ひっ！」

その人は恐怖に目をつむったが衝撃は来なかった。

「はっ！」

頭にカチューシャをつけた、茶色いロングヘアの女性、デイドがその異形を蹴り飛ばしていたため、衝撃が来なかった。

「ここにいと危険です。今すぐ離れてください。」

デイドは市民の方に向き避難するように言った。

市民はその場からできるだけ遠くに離れ言った。

「オラッア！」

途中で襲われそうになっていた人はノーヴェやウェンディ達に守られ逃げ延びていった。

「ドクターも随分と無茶な作戦を出しましたね」

デイドは迫りくる異形達を見ながらひとり呟いた。

スカリエッティが立てた作戦はこうだ。

犯罪組織『ヴェンネット』を壊滅させ、市民を守り市民から救われたという概念を作り出し管理局より優れていることを証明することだ。

同時に自分たちを犯罪者から勇者に置き換えさせるというものだ。

「最低、と思われても構わないさ。私は自分の欲望に素直に生きる、なぜなら私は無限の欲望だからね」
アンリミテッドデザイア

（ドクター、あなたは最低なんかではありません。あなたは私たちの産みの親です。尊敬にあたる人です。それに健一も…）

デイドはそんなことを考え異形達を次から次へと倒していく。

魔法って聞かれてすぐ使いこなせる奴は最早天才レベル（後書き）

ランキングですが無理っぽいです。

すいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4709x/>

石ころ的な物を拾ったら犯罪者のアジト！？

2012年1月14日15時53分発行